天・恋姫†無双～願わくば君との時間を～

クライト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天・恋姫†無双～願わくば君との時間を～

【Ｎコード】
Ｎ５２２４Ｎ

【作者名】
クライト

【あらすじ】
国の覇権を争った末、三国はそれぞれに国を治める
戦いの傷痕も癒えぬまま青年と覇王は最期の言葉を交わす
青年は成すべき思いを成し、覇王もまた覚悟を言葉に…
天・恋姫†無双～願わくば君との時間を～

…閉じた外史、今一度語られん

◇◆第一話◆◇（前書き）

こうなる事は分かってた、ただお互い気付かないフリをしてたんだよな

な、華琳…

◇◆第一話◆◇

『さようなら、寂しがりやの女の子…愛していたよ…華琳…』

そう、俺はこの世界から消える…大切な女の子の涙も拭えず、少しずつ自身の身体の感覚も失われていっている…

…華琳…結局振り向いてくれなかったな…最後くらい…彼女の顔…見たかったのに…

◆◇◆◇◆

…現実感がない…まるで海を漂っている様な浮遊感、しかし何かに捕まえられているかの様な安定感も感じる、いったいここは…

「な、なんだこれっ！？」

眼前に広がるのは宇宙、いや、正確には宇宙ではないのかも知れないがそう呼ぶに相応しい真っ黒な空間に星々の様な輝きが点在して

いる

「…って、星がやけに近い気がするんだけど、何なんだよこれ、幻か？ＣＧか？地和の妖術か！？……ってんなわけないよな…だって俺もうあの場所にはいられなかった訳だし…」

最後だけ否定する

悔しいが仕方ない、これは俺が歴史に逆らった結果なのだ、未練はあるが後悔はない

「ま、つまりは幻かＣＧかって所だけど…ＣＧの線は却下、眼鏡も掛けずにＣＧって俺のいない間にどんだけ進歩したんだ科学！！って話になるし、つまり幻？」

１番近い星みたいな球体に近付いていく、見掛けは俺が両手を伸ばして一抱えにできるかどうかくらいのデカイ球体だが煌々と輝く様はどう見ても馬鹿でかい電球とかいうオチはなさそうだ

ん？球の中で何か動いた？

恐る恐る球を覗き込むと…

そこには

三国の女の子に囲まれ楽しそうに笑う自分の姿があった…

…なんだこれ…なんの冗談だよ…？

慌てて他の球も覗き込む

苦しそうな孫策さんを抱き抱えた自分、袁紹さんと一緒に大荷物を抱え歩いている自分、何故か武将として戦場で武勇を奮っている自分までいる、その幾つもの球に共通している事、すなわち…

「全部俺、だよな…？」

間違えようがない、軍師とか召し使いとか武将とか役割はいろいろ違うみたいだがあれはどうみても俺だ

「…何なんだよ…」

本気で泣きそうだ、なんでどの俺もあんなに生き生きしてるんだろうか…俺一人だけのけ者みたいじゃないか

「…そっかぁ…俺、のけ者なのか…」

世界から弾き出された俺、他の自分には居場所があるのに何故俺にはないのか…

『…それは御主人様の居た世界に御主人様を支えるだけの力がなかったの…』

「誰だっ！？」

『こっちに来て…御主人様…貴方の望みを叶えたいのなら…貴方の願いを現実にする方法を教えてあげましょう…』

「俺の願いを現実に…？なら！！」

夢中で走る、声が導く方へ、この空間がどれだけ広いのかわからないしこの球みたいな物もどれだけ浮かんでるのか知らないが一心不乱に走る、走る、走る

走る内にだんだんと景色が寂しくなってきた、黒い空間の景色が寂しくなるというのもおかしな話だが仕方ない、…周りの光が少しずつ減っていってるのだ、球が減ってる訳ではない、球自体が光を放ってないのだ

「御主人様…」

「呼んでたのはあんた…って、うおぉ！？」

ズザザッ！っと音を立て大きく後ろに飛び退く

だってそうだ、振り向いたらいきなり目の前に筋肉隆々のマッチョが居てみろ、人間何かしら反応するはずだ、…しなきゃおかしい

「…あらん？御主人様、どうしたのん？もしかして久しぶりに会って照れてるの？もぅ！可愛いわぁん♪」

バチンッと音を立てそうな強烈なウインクに思わずめまいを覚えた…うん、今俺とこのマッチョの間には埋めようの無い溝が生まれた、間違いない、これはハムの人、じゃなくホ〇の人だ、…この距離感が適切…というかこれ以上近付きたくない…

「御主人様ぁん、そんなに離れてちゃお話しづらいわよん？御主人様にとってとっても大切なお話よん？」

うぅ…嫌だけど仕方ないにじり寄るように少しずつ接近、会話にはある程度適切な距離（２ｍちょっと）を維持しつつ会話の姿勢へ

「…なんだか少し遠いんだけど、ま、御主人様が恥ずかしがり屋さんなのは仕方ないわねん♪ここからはすこぅし大切なお話になるから覚悟してねん」

…なんだろ、大事だって言われても信用出来ねぇ…

「御主人様は向こうで浮いてる球を見て何か思ったかしら？」

「あれ、全部俺だよな？あれはいったい何なんだ？」

「あれは全て御主人様の歩んだ外史、初めは一人の御主人様から生まれ、枝分かれした無数の外史が集う場所…」

「外史？俺から生まれたって…」

「外史、というのは御主人様が初めから知っていた歴史とは違うもの…つまり曹操ちゃんと御主人様が歩いてきた普通の歴史とは違う歴史の事よ」

「言うなれば華琳が曹操だって事自体外史って事なのか？」

「えぇ♪そういう解釈で良いわん♪さっすが御主人様♪理解が早く

て助かるわん♪」

良いからさっさと話進めてくれ…

「…俺から生まれたってどういう意味なんだ？」

「…外史、というのは始まりの起点は一つなの、始まりの御主人様から始まっていろいろな方向に進んで行く、御主人様が曹操ちゃんと歩いた様に、時には劉備ちゃんと、孫策ちゃんや孫権ちゃんと、公孫賛ちゃん、袁紹ちゃん、名前を知らない様な娘達、たくさんの人と御主人様は物語を紡いだ、…けど結局はどの物語も一つの答えを御主人様に与えて終わりを告げる」

「答え？」

「『御主人様には物語を始める事は出来ても終わり方を決める事は出来ない』…これが外史というものの大前提…御主人様がやった事はとても尊いものだけど外史のルールがそれを認め無かった…」

「だから俺は外史から弾き出された…」

何も言わず頷く

「…なら俺に悔いは無いよ…秋蘭や流琉が助かったのも他の娘達があの赤壁で焼かれる事がなかったのも俺があの時言わなきゃいけなかったんだから」

ならばもう文句など無いではないか、俺は俺のできる精一杯で頑張ったのだから悔いなどない

「…そうも言ってられないわ…」

「ん？」

「あの外史のルールは『限りなく正史に近い外史として完結する事』、御主人様が弾き出されたのは御主人様という異物を取り込むので精一杯だったものが正史から外れた御主人様の行動によって御主人様を支え切れなくなったのが原因…、あの外史を『再開』させるならもう一度御主人様を支え切れるだけの力を与える必要があるの」

「さ、再開って！？俺もう一回華琳の所に帰れるのかっ！？」

「…多分、御主人様にとって辛い選択になるわ、それでも良い？」

「…教えてくれ」

硬い声色に思わず俺まで硬くなる

「…私が用意できた方法は二つ、一つは始まりの外史から別れた外史全てを切り離して御主人様と曹操ちゃんの外史にのみ力を送って外史を再開させる方法」

「え、えと…どゆこと？」

「外史の始まりは一つだとさっき話したわね、『もし三国志に登場する人物が女の子だったら…』、『もし劉備が未来人だったら…』そんな『もしかしたらあるかも知れない』『有ったら面白いだろう』という人の願いが無数の外史を生み出すの、始まりの外史はその力

が後から生まれた外史よりも遥かに強い、その力を御主人様と曹操ちゃんの外史に送れば直ぐにも御主人様を外史に送ってあげられるわ」

「…他の外史は？…さっき切り離すとか言ったよな？…切り離された外史はどうなるんだ？」

「…他の外史は誰からも望まれる事は無くなり、…あのまま消えるわ」

「…なら嫌だ、…そんな方法俺は認めない…だって…みんな笑ってたんだ…俺だけでなく、周りにいるみんなが幸せそうだったんだ…確かに孫策さんの様に望まれない結果も有っただろうさ…でも、みんな最後は笑顔だった…俺一人の為にみんなの笑顔、消したり出来ないよ…もう一つの方法を教えてくれ…それが納得出来なかったら俺スッパリ諦めるよ…わがままでごめん、…えっと…名前は…」

「私は貂蝉、都のしがない踊り子よん♪」

「そっか…あんたが貂蝉……」

「あらん？何時もの御主人様らしからぬ反応、いつもなら『嘘っ！？』とか『これが貂蝉！？』とかものすご～く失礼ぶっこいてくれちゃうのにん…これはこれで寂しいわねん…」

「流石に想像通りとはいかないけどね」

これが予想通りとか言ったら奇跡過ぎる

「…何となく失礼な事言われた気がするけど、ま、良いわよん、…で、本題に戻るわね、御主人様が選べる選択肢のもう一つ、私としてもこっちが本命だったんだけど…こっちも御主人様にとってはつらい選択になると思うわ」

「…教えてくれ」

「もう一つの方法、それは『あの外史と対になる外史を御主人様が物語として完結させる事』、これが条件よ」

「対になる外史？」

「外史という物は大きく分けて3種類あるの。互いにある程度影響し合う『近い外史』、逆に全く影響しない『遠い外史』、そしてそのご主人様の外史とは対極の位置に存在する『真逆の外史』の3つ」

「遠い外史と真逆の外史ってのは何が違うんだ？」

「遠い外史っていうのは御主人様がさっき見てきた劉備ちゃんや孫策ちゃん達と一緒にいた外史の事。曹操ちゃんと一緒に外史を進んだ御主人様とは関係のない外史の事よ」

「…なるほど、で、真逆の外史ってのは？真逆って事はそれも全く関係ないのか？」

「…それがご主人様にとって1番重要な話、ご主人様の行き先はその真逆の外史なの」

「どういう事だ？」

「真逆の外史は名が指す通りご主人様と曹操ちゃんの外史のちょうど対極の位置に存在する外史、それがこれ」

そういって背後から取り出された球は今まで見てきた球と同じ、ただ違うとすれば…

「随分弱々しい光だな…まるで消えかけてるみたいだ…」

「…そう、この外史は終演を迎えようとしているの、幕が開かれる事なく…」

「ど、どういう事だよ！？始まらないのに終わるって…？」

「ご主人様が曹操ちゃんと歩いた外史は既に終演してしまった、きちんとした主役を迎えはしたけど、主役がきまりを無視したまま幕を上げた為に途中で舞台から降ろされ、舞台も中止してしまったようなものなの…」

「…つまり俺か…？」

「仕方ない事よ…ご主人様はきまりを知らされず、突然舞台に上げられてしまったのだもの、自分のできる事をするのは当然、それが大切な女(ひと)を救う唯一の方法なら尚更…ただ、世界がそれを認めなかった、あの世界のきまりは『正史の通りに世界を進ませる事』だったのだから」

「たしかに…そうだよな、俺、多分この話知っててても多分秋蘭や流琉の為になら消えるの覚悟しただろうし…貂蝉、話の続きを頼む」

「行き方は簡単、私がこの外史へ一時的に力を送る、後はご主人様が向こうでいくつかの条件をクリアしてくれれば良いの」

「教えてくれ」

「一つ目は簡単よ、ご主人様の行き先や立ち位置が変わるって事を理解していてくれればＯＫよ」

「行き先と立ち位置…行き先はつまり俺が前に落ちた…というか現れた場所とは別な場所って事に行くって事だよな？…でも立ち位置って？」

「前は曹操ちゃんに拾われて『天の御遣い』って事にされちゃったでしょう？今回は別な人の所に居着く事になるでしょうから、他の役職や何かになりそうでしょう？」

「だから立ち位置が変わるのか、ここまでは分かった。続けてくれ」

「二つ目も難しくないわ、『史実で生き残らなかった人を生かすようにする事』よ」

「難しくないって…」

「曹操ちゃんの所でやったようにすれば良いのよ、歴史をご主人様の思う通りに変えてしまえば良いの、一度やったご主人様なら簡単でしょ、ウフッ♪」

…舌を出すな…舌を

「…でもそうすると俺、また世界から弾かれちまうんじゃないか？」

「あらん、鋭いわねん、でもその答えはＮＯよ、安心して良いわん♪」

「…どうして？」

「それわね、今回ご主人様が向かう外史のきまりが、『正史とはまったくそぐわない新しい歴史を歩む事』なの」

「…真逆ってのはそういう事か…華琳との外史が『正しい歴史通りに進む』事に対して、その外史ってのは『正しい歴史にそぐわない事』がルールな訳…」

「そういう、こ・と♪」

「だから科を作んなって…つまり俺が前の様に歴史を変えたりしても大丈夫なんだな？」

「えぇ、むしろ、歴史から外れた方が好ましいわ、正史から外れれば外れる程この外史は力を持つ、この外史が力を取り戻せば、曹操ちゃんの外史も自然と力を取り戻すの」

「真逆にあるからこっちが強いとあっちも強く、って事か」

まるでバランスの取れた天秤みたいだ

「ここまでは良いわね？…そして、これが最後の条件にしてご主人様にとって1番つらい条件よ、…条件の三つ目は『ご主人様は曹操ちゃんと敵対すること』」

「て、敵対っ！？華琳と戦えってのかっ！？ま、まさか華琳を殺せなんて言わないよなっ！？」

「落ち着いてご主人様、言い方が悪かったわね、『戦う』というより『曹操ちゃんを救う』って言った方が良いわね」

「…救う…？」

「そう、曹操ちゃんの敵となって彼女の覇道を止めて欲しいの」

「華琳の覇道を…」

「…彼女は貴方と共に歩んだ曹操ちゃんとは少し違う曹操ちゃんなの、彼女は覇道を目指したいとは思ってない、でも苦しむ民を見てられない、救えるのは自分だけ、だから立った、でも自分が苦しむ姿は人には見せられない…その苦しみが彼女を蝕み、彼女を病へと落とし込んでいるの…」

「なんだって！？」

「まだ本人は気付いてないわ、随分長いこと患っているから何時もの事と割り切ってしまってる、でもこの偏頭痛が続けば曹操ちゃんは覇道を成し遂げる前に亡くなるでしょう、…そして曹操ちゃんが死んでしまえばこの外史も力を失ってご主人様の外史の扉も開く事

がなくなるわ」

「…華琳…」

彼女も堪えていたのだろうか…頭痛なんて話聞いた事はなかった、彼女はそれにずっと堪えていたのだろうか…

「お願いご主人様、曹操ちゃんを救ってあげて、ご主人様は傍にいてあげられないけれど彼女が立つ必要の無い位強い国を作って、三国を平定して欲しいの」

「俺の答えは決まってる！華琳の為なら何度だって戦う！きっと彼女を救ってみせる！！」

「…ありがとうご主人様、すぐに送るから少し目を閉じて…」

言われた通りに目を瞑る

「外史の鍵、北郷一刀の命により、新たなる外史の扉開かれん！導くは管理者貂蝉の名の下、いっくわよ～ぉん！！」

瞼の裏に激しい光を感じ、その光の正体を知る前に北郷一刀の意識は世界から消えた

「…行ったのか？」

「えぇ」

「大丈夫なのか？もっといろいろと伝えるべき事がなかったか？」

「大丈夫、ご主人様はもう可能性の欠片は掴んでる、後はそれを磨くだけ…」

「答えは教えなかったのか？」

「ご主人様がフィナーレを迎える頃にはもうご主人様自身気付くわ、私の介入はここまでよ」

両手で抱えた鏡の罅、徐々に広がるそれはやがてそのまま鏡を粉々にし、光の粒子となって消えた

「語られざる外史、語り手を求め今一度語られん、か…今度の北郷一刀もなかなかに楽しそうだ」

そう一言言い残し男の気配は消失した

「頑張って、ご主人様…」

一人呟いた声はそのまま闇へと吸い込まれた…

◆◇第二話◇◆

「ってぇ…いったいなんだったんだよ今の光…って、ええっ！？」

周りに広がる水墨画に色を付けた様な風景、かなり見慣れた景色だがどこら辺かは皆目見当がつかない、少し肌寒い空気が北の方らしい事を告げてるが…

「まったく何処か分からん…良く考えたら俺って洛陽より北ってあんま行った事無いし、そこら辺なのかな？」

だとしたらちょっと厳しいぞ、どっちに行けば村があるかなんて分からないし、下手に国境越えなどして何処か大国に見付かれば俺などただの怪しい人間だ

「さて、どうしたもんか…あれ？ありゃあ…」

地面に転がる物体を拾い上げる、紛れもなく俺の木刀とフランチェスカ指定の肩掛け鞄だ、ご丁寧に中身の教科書は詰まったままである

「これ貂蝉が寄越してくれたのかな？」

だとしたら大助かりだ、筆入れにはシャーペンやらボールペンなんかが入ってて売ればそれなりの路銀にはなるし、教科書の歴史なんかの知識はこの時代でも使えるだろう

「…国語、英語、地理はいらないか？…いやいや、好事家なら高値

で買ってくれるはずだ、持っておこう」

肩にズシッとくる重みは長期休暇の前の置き勉持ち帰りに似てる、しかし事情が事情だし、そんな暢気な事も言ってられない

街道に出れれば何とかなりそうだが…

「…ま、何とかなるか」

俺は適当に西を目指し歩き始めた…

◆◇◆◇◆◇◆

「…思ったより上手くいくもんだなぁ」

しばらく進むときちんと街道らしき道に出た、街道に『らしき』とつけたのはほとんど整備された様子がなく、馬車が通って歩いた跡だけで道ができてるようだ

「…やっぱ時間戻ってるのかな、大抵の道って華琳が整備の人員回してたからここまで馬車の行き交いがあるなら整備してるだろうしなぁ…」

ま、道がないよりはマシか、後は北か南だけど…

「北には森、南は荒野、さてどうすっか」

荒野より森の方が安全なのは間違いない、盗賊の類いは拓けた場所の方が仕事をしやすい

…森の中では馬が自由に使えないからだ、相手を襲う、奪った荷を運ぶ、それには必ず馬がいる、だから盗賊を生業とするなら森より平地を選ぶはずだ

…ま、根城が森の中でたまたま鉢合わせ、という事も考えられない訳じゃないけど…

「やっぱ森かなぁ…」

一応木刀はある、森の中で木々を盾に立ち回ればある程度の数ならば戦えるはず、一応こっちは元警備隊隊長、一般人に毛が生えた位なら勝てるはずだ

「二〜三人程度なら…なんとかなるかなぁ…」

我ながらなんとも低い志、まぁ仕方ない、今が黄巾の乱の前辺りだとしても腕が立つ者はかなり立つのだ

「…て言ってもここが北方なら公孫賛さんやら袁紹さん辺りがなんとかしてくれてるだろうし、そこまで大規模なのはまだいない…」

『うら！！お前ら逃がすんじゃねぇぞ！！』

『『へい！！』』

俺は聞こえた怒声に弾けるように走り出した

◇◆◇◆◇◆

～？？？ＳＩＤＥ～

必死に森の外を目指し走る、足の感覚は既に失せ、両足はずっと前に始まった回転運動を続けるだけの機械の如く、惰性に任せて回しているだけだ、一度でも止まれば動く気などまったくしない

だが諦めるわけにはいかない、自分の考えが甘かったばかりの失態、少なくとも『月』だけは無事に逃がさなければならない

…事の顛末はこうだ

隣県に派遣された県令がどうやら村や街から厳しい税率で搾取を行ってるとの報告があり、月が自分で現地の様子を見に行くと彼女のお父さん（董君雅様）に留守を任せて視察に出たが…

（迂闊だった…！もうこんな所にまで地方賊が出始めてるなんて…！！）

護衛５人は先程離れ離れ、多分もう…

囲まれた数は１０人、３人は囲まれた段階で倒せていた、後何人倒せたか分からないがこのままでは二人ともまずいのは分かっている

何よりもう月が限界、普段青白い顔は真っ赤に染まり、息絶え絶えに健気に指を握ってくれている状態

（…これ以上逃げられない…月だけでも…）

でも無理だろう、この見た目以上に頑固なお姫様はこういう時の僕の話はまったく聞いてくれないのだ

（まったく僕ってば何考えてるんだろ…）

自嘲の笑みが浮かんだ

「あ…！！」

月の声に一瞬体が揺らいだ

振り向こうとした体が重力に引かれる、意識した頃にはもう遅い、そのまま二人揃って泥まみれの地面に倒れ込む

「ゆ、月！大丈夫っ！？」

「…はっ…はっ…う、うん…平気だよ…」

まったく平気そうではない、私だって足が言うこと聞かないのだ、月も限界だろう

私達が立ち上がる頃には茂みを掻き分け男達が姿を現した

「散々手子摺らせやがって…テメェらの護衛のおかげで七人もやられちまった…この落し前、きっちり付けさせてもらうぜ」

首領らしきヒゲで痩身の男が曲刀を鈍く光らせながら近付いてくる

思わず月と後ずさる、が直ぐに木に背がぶつかった

「おいおい？そんなに邪険にすんなよ、これからしばらくは付き合うんだからよぉ」

「つ、付き合うって何よ！私達はあんたなんかといたかないわよ！！」

「テメェらがいたかろうがなかろうが関係ねぇよ、ま、短い付き合いだ、奴隷商に売り飛ばすまでのな」

ニヤリと笑ったヒゲが太った男と小さい男に指示を出す

「お、おとなしくするんだな、おとなしくすれば乱暴しないんだな」

「これ以上手間かけさせんなよ！！」

デブは巨体をゆらし、ちびはちらちらと剣を照り付かせ近付く

「へっへっへっ…」

（だ、誰か…！）

「…誰か…助けてっ！！」

「うおぉぉぉぉ！！」

え？

草の陰から踊り出た白い影は一直線にちびの方へと駆け手に持った木製の剣をちびの脳天を叩き込んだ

「げぐぅ！？」

地に倒れ込むちびを無視しそのままデブに突進、武器を握ってなかったデブが剣を抜く前にその、人よりでかい顔面へと木製の剣が疾った

「っ！？」

デブが仰向けにひっくり返って、泡を吐いているのを確認しながら視線は正面のヒゲから逸らしたりしない

…間違いない、この男、戦慣れしてる

だが一瞬目の前の男の空気が何故か軽くなった

「二人とも、大丈夫か？」

男はまるで古くからの知人に話し掛けるかの様な軽い挨拶をしてきた…

◆◇◆◇◆◇

～一刀ＳＩＤＥ～

「二人とも、大丈夫か？」

二人の様子に気を配りながらヒゲの動きを注視する、間違いない、このヒゲ、チビ、デブは華琳に追われていた太平要術を盗んだ三人組だ、もう既に太平要術は盗んだのか分からないがまだ盗んで無いなら上手く行けば

《こいつらを捕まえる→太平要術盗まれない→天和達が暴走しない→黄巾の乱未発生》

こいつらをここで抑えれば随分歴史が変わる可能性がある、ここはやるしかない

「ちきしょう！ちび！でふ！ずらかるぞっ！」

「いっつぅ…へ、へい…」

「は、はい…なんだな…」

「あ！待てっ！！」

「これでも…、喰らいやがれっ！！」

「ぐっ！？」

ばらばらと投げつけられた小石の飛礫に咄嗟に顔面をガードする

全身に細かい痛みが走ったが直ぐに追いかけようと動いた
が、
後ろに庇っていた二人の事を考え、止めた
俺が追い掛けていって彼女達を危険に晒す訳にはいかない、逃げた
ふりの可能性もある、悔しいがここは堪えるしかない
「…ふぅ、大丈夫かい？」
多少震えながらコクリと頷いた二人の様子に安堵する
「…助けて頂いてありがとうございます…」
「…ありがとう、感謝するわ」
「いや、二人が無事で良かったよ」
とりあえず放り捨てていたカバンを拾いに草むらへ
「ちょっ！ちょっと何処行くのよ！！」
「いや、咄嗟に飛び出したから荷物を放り捨てちゃっててね、すぐ
そこだよ」
「そ、そう、なら早くしなさいよ…」
直ぐに草むらの陰へ入りカバンを拾いながら一考

彼女達の事を俺はある程度知っている、彼女達を洛陽で最初に保護したのは俺達だし、統一戦の後も蜀陣営で仕事をしていたのも見ている

しかし俺は二人の名前を知らないし、今の二人は少なくとも俺を知らない、やはり最初から知らない振りをすべきだろう

「お待たせ」

「で、早速聞きたいんだけどあんた何者？私達を助けた目的は？」

キッと鋭い視線を向ける眼鏡の娘、おやまぁ、完全に疑われてるらしい

「え、詠ちゃん…失礼だよぉ…」

「月、ちょっと黙ってて、確かに助けられた事に感謝はしてるけどそれとこれとは別よ、こいつが今の奴らの仲間じゃないとは言いきれないもの」

「…ん、まぁ現れるのがちょうど狙ったみたいなタイ…機会だったしね」

正直疑われてもおかしくはないタイミングだった

「…でも、詠ちゃん…私達二人相手にそんな事する必要ないと思うよ…？」

「うっ…それは…」

「大丈夫だよ、助けてくれたんだもの、それにお礼くらいちゃんと言わないと失礼だよ」

なんとも良い娘だ、あの時劉備さんの所に預けて正解だったらしい

「もぅ、月はすぐにそうなんだから…でも、確かにあんた怪しい感じはしないしね…悪かったわ、疑ったりして」

「いや、危ない所だったんだ、警戒するのも無理無いよ、それより少し教えて欲しいんだけど、ここはどこら辺何だろ？」

「…あんた、そんな事も知らずに旅してた訳？」

「いや～…アハハハ…」

思わず苦笑い、まぁこの反応は至極当然、旅人が『ここどこですか？』なんて冗談としか思えない発言だしね…

「…ふぅ…少なくともあんたに害がなさそうなのは分かったわ、…ここは涼州隴西群臨県の街へ通ずる街道よ」

「涼州かぁ…参ったな…北だとは思ったけどそんなに西だとは…」

「…良くあんた今まで生きてたわね」

「え、詠ちゃん…失礼だよぉ…」

「ははっ、まぁ事実だしね、気にしないで」

「へぅ…すみません」

「本人が良いって言ってるんだから月は気にしなくて良いのに…」

「詠ちゃん…」

「うぅ…分かったよ～…分かったから僕をそういう目で見ないでよぉ…」

白い髪の娘の目がウルウルしてる…ありゃ反則だ、俺だったら罪悪感で土下座する

「まぁまぁ、それより身の振り方を考えよう、二人はこれからどうする？街へ続いてるならこのまま俺もついていくよ？」

「…そうね、二人じゃどうしようもないし、いったん街に帰った方が無難ね、月、一度帰って出直しましょ、董君雅様に一度報告しないと」

「…董君雅様？」

董君雅？何処かで聞いた名前だぞ…？

「私のお父さんです、北の街で県令をしてるんです」

…待てよ…董君雅…父親…そして何より『俺は彼女達と何処で初めて会った？』

組み合わさる事のないはずのピースがはまっていく

「…二人の名前、聞いても良いかな？俺は北郷、字はないからそう呼んで」

「北郷？変わった名前ね、ま、良いけど、僕は賈駆、字は文和、そしてこっちの娘が…」

「董卓仲頴と申します、よろしくお願いします」

「董卓…」

やっぱり…

「えと、…私の名前、変でしょうか？」

「あ、いや、ごめん、ちょっと知り合いに似ててさ」

…そういえば前に華琳が言ってたっけ、洛陽で董卓が暴政してるって話は袁紹さんのでっちあげだって

確かにそうだ、目の前にいるこの娘がそんな人間だなんてありえないほとんど勘だがこの勘は信用できる、今まで警備隊でいろんな人間を見てきたのだ、その勘がこの娘は『そういった人間』とは違うと

告げている

（…にしても、まさか董卓だったとはね…迂闊だった、あの時は完全にその可能性は無いって思ってたしなぁ…）

「…ぇ、ねぇ！ちょっと聞いてるの！？」

「うぉ！？ご、ごめん、聞いてなかった…」

「だから、あんたはこれからどうするつもり？」

「どうするって？」

「街道を歩いてきたのよね？街に向かうつもりなら護衛を頼みたいの、さっきまでいた場所に馬車があるからそれに同乗してくれるだけで良いわ、きちんとお金も払うから頼まれてくれない？」

「いや、お金なんて良いよ、どうせ向かう先が一緒なんだから…」

「命助けられて更に貸し作れって言うの？」

…おぅ、そういえば貸しはそれ相応の礼をするのがこの国の礼儀だった、借りっ放しは面目を失う程に恥ずかしい事なのだ

「失礼、受け取らせてもらうよ」

「…ありがとうございます、北郷さん」

ニコリと微笑んだ董卓ちゃんの表情に先程の考えが間違いないと思えた

「じゃ、行きましょ、どちらにしろあんたにはお礼位はしないといけないんだから、ほら、月も」

「へぅ、詠ちゃん、待ってぇ…」

仲の良い姉妹の様に手を繋ぎ歩く二人の姿を眺めながら自分のこれからに思いを馳せるのだった

◆◇第二話◇◆（後書き）

寸劇†無双

「天・恋姫無双～願わくば君との時間を～第二話、ようやく投稿と相成りまして、第二話から前の様にあとがきを書く事になりました、司会はお馴染み北郷一刀でお送りします」

「………」

「………」

「………」

「イヤッフッー！！（一刀がはっちゃけました）」

「フハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！華琳がいないこの空間に何の恐怖が有ろうか！！やっと！…やっときた俺の時代！！遂に北郷一刀は自由を得たっ！！」

「っと！暴れとる場合じゃありゃしません！！一応ここでは次回のサブタイトルを発表しないといけないらしいんでＣＭ風にいきたいと思います！どうぞ！！」

信じた者の裏切り…北郷一刀の慟哭は燃える洛陽の空へと響く

「董卓ちゃん！！」

「……」

「何で！！何でこんな事っ…！！」

「……」

「何か言ってくれよ！！董卓ちゃん！！」

「……タのに…」

「…え？」

「貴方さえいなければ私は王になれたのにっ！！」

董卓の瞳に宿るのは…どす黒い憎しみの色

「…董卓ちゃん…」

「貴方さえいなければ貴方さえいなければ貴方さえいなければ貴方さえいなければあなたさえいなければあなたさえいなければアナタサエイナケレバアナタサエイナケレバアナタサエイナケレバァァ！！」

燃える洛陽に響く血を吐くような悲痛な叫びに思わず耳を覆いたくなる

「…目を覚まして、董卓ちゃん…君はそんな娘じゃない！！」

「…私の何がわかるんですか？私の願いが、詠ちゃんと一緒に願った未来が……でも…もうどちらにしろ無駄ですね…もう…は…」

ゴホゴホと嫌に湿った咳を吐く董卓ちゃん

胸元が炎とは別の赤で真っ赤に染まる

美しい程の血の赤

崩れ落ちる董卓ちゃんに駆け寄った

「…ごめん…ね…詠…ちゃん…」

静かに目を閉じる董卓ちゃん…

「…何で…何で…こんな事に…」

…次回、『天・恋姫†無双～願わくば君との時間を～◇◆第三話◆◇　董卓仲穎、本性を現し、洛陽は涙に沈むの事』

…一刀は救うためにまた一つ何かを失う…

「…って嘘を吐くなぁ！！」

「へぶぉ！！」

「なぁにが『董卓仲穎、本性を現し、洛陽は涙に沈むの事』よ！ど

う考えても月のキャラじゃないし！ていうかまだ洛陽にすらいないわよ！！」

「え、詠…何故…ここに…ここ、…一般人…侵入禁止のはず…」

「ふっ、愚問ね、このスタジオに入るには魔法の言葉『ゲストとして呼ばれました♪』って言ったら簡単に僕達を通してくれたわよ」

「くっ…そんな裏技が…ていうか今僕『達』って言った？」

「…へぅ…一刀さん…私の事…あんな風に思ってたんですね…」

「えっ、ゆ、月ちゃん！！違う！！あれは作者が！！作者がぁぁ！！」

「問答……無用っ！！死ね、北郷一刀っ！！」

「え、詠！！８の字！！８の字はやばいって！！駄目っ！！デンプ〇ーロールはやばいよっ！？」

「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね…もうひとつおまけに…死ねぇ！！」

「ぎゃあ゛ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

キラン…☆（北郷一刀、お星様に進化）

「ふぅ…悪は滅んだわ！！もう大丈夫よ、月」

「詠ちゃん…」

「もう心配ないわ、さ、本当の次回予告しましょ」

「うん、ありがとう、詠ちゃん」

男は思う、娘が自分に初めてわがままを言った日の事を

「…私、お父さんの様になりたいんです、お父さんのお仕事が大変なのは分かっています…でも、私…みんなの為に頑張りたいんです…！」

この娘は優秀な太守になるだろう

…だから反対だった

優秀であれば都に上る事になる

そうなればそこに巣くう毒蟲達がこの娘の心を蝕むだろう

だがこの娘の意志は変わらない

ならばどうするか

せめてこの娘を守れるだけの力を持つ者をそばにおく、これが最良の選択

次回、『天・恋姫†無双～願わくば君との時間を～◇◆第三話◆◇
　董君雅、北郷を必要とし、北郷、董君雅の願いを聞くの事』

……

……

…

「へぅ、お父さん登場ですか？」

「通常版の恋姫では確か両親共にいる事になってるけど、この天恋では既に母親は他界、僕の両親はいないって事にする気らしいわ」

「詠ちゃん、ご両親いないの…？」

「恋姫では月の両親は人質だったけど僕の両親って不明なのよね」

「へぅ…詠ちゃん大変だね…」

「月が気にしても仕方ないでしょ、それよりほら、ちゃんと締めないと終わらないわよ」

「あ、はい…次回もよろしくお願いします」

「「それでは～」」

寸劇†無双　終

◇◆第三話◆◇

北に向かう事四半刻（３０分程）、見えて来た街はなかなか綺麗で大きな街

威勢の良い声で客を呼び込む商人や買い物客の姿は洛陽のそれとなんら変わりはない

「随分活気ある街だね」

「当たり前でしょ、僕達が治めてる街なんだから」

「…詠ちゃん」

めっ、と指を立て怒る董卓ちゃん

…正直全然怖くない、というかむしろかわいい位だ、だが賈駆は『うぅ～』なんて呻きながらしゅんとしている、董卓ちゃんにはまったく頭が上がらないらしい

…しかし驚いた、彼女がまさか董卓とは、

俺のイメージでは太った目つきの悪いいかにも悪人顔のオバハンだったのだが、そのイメージをここまで崩壊させられるとは…

髪は銀色と白を混ぜたような綺麗な輝きを放ち、立ち居振る舞いや女性らしい丸みを帯びたシルエットは太守様というよりは深窓のお

姫様といった方が似合う程だ。
…何よりその周りを見つめる瞳は優しい光を湛え、街のすべてを慈愛で包むようだ
はっきり言おう
（何処が董卓やねん！！）
あらん限り叫びたい、彼女は董卓ではない
「…あんたさっきから月の顔ジロジロ見過ぎよ」
こっちにガンを飛ばす賈駆、ついでだから彼女も少し考察してみる
緑がかった髪に眼鏡、元々目付きが良くないのか睨まれてる印象を受ける（いや、多分今は本気で睨まれてるが…）。だがその言動の端々から董卓ちゃんを気にする発言が見受けられる辺り、よっぽど董卓ちゃんの事が好きらしい
「…あんた、月を見るなって言われたからってこっちを見てるのは、僕に喧嘩売ってんの？」
「いや、傍に二人もかわいい娘が居たら嫌でも見たくもなるだろ？」
「なっ！？」
「…へぅ…」
驚いて赤くなってる賈駆と頬を抑えてモジモジしてる董卓ちゃん、

やべぇ両方かわいい…

「あ、あんた！下手なお世辞言う暇があるなら街の感想の一つでも考えてなさいよ！！」

「いや、だってさっき感想言った…」

「うるさいっ！もっと具体的に何か有るでしょ、ここが良いとかこうしたら街がもっと良くなるとか！！」

「突然無茶振りするなぁ…えぇと、そうだね…気になったのは警備の詰め所の位置かな」

「はぁ？詰め所の位置がどうかしたの？」

「あれじゃ遠いんだよ、もし何か事件があっても駆け付けた時にはもう終わってるなんて事になってるんじゃない？」

「…確かにそういう報告は有るけど財政的に余裕がないの、どうしようもないのよ」

「それなら街の有力な商人達に出資を頼もう、治安が良くなればそういう商人達は物の流通を確保し易くなるし、そういう商人達の番付でも出せばきっと出資してくれると思うよ」

「流通の話は分かるけど番付って何よ？」

「えっと、出資してくれるって言った商人さんを出資額に応じて順位付けして決まった場所に貼り出すんだ、そうすれば街の人はそれを見て買い物をする、名前が分からない場所から買うより分かる方が安心だからね」

「でも…それでは大商人さんと小さい店をやってる商人さんとじゃ差が出来てしまうんじゃないですか？」

「小さな店の商人と大商人とは別々にすれば良い、小商人は小商人と、大商人は大商人の競ってもらえば不公平じゃないだろ？」

「……」

「……」

「あ、あれ？今の説明、分かりにくかった？」

「…あんたいったい何者よ…？それ、素人の考えじゃないわよ…」

「…へぅ、凄いです…」

賈駆は怪しむ様に、董卓ちゃんは驚いた表情でこちらを見ている

「え、あ、まぁ、少しだけそういう仕事の経験が有って…」

「ふぅん…そう…」

詠は思案顔で顎に手を当て考え込んでいる

「…あ、北郷さん、あそこがお家です」

「へぇ、なかなか立派なお家だね」

良かった…追及されずに済んだか…魏が国としてない以上まだ何処で警備なんかの仕事をしていたかなど追及されては困る

…にしても家というより屋敷だな、街の人の様子から不平や不満があるようには思えないし、よっぽど信頼されてるのだろう

「一応太守の家だもの、立派にしとかないと都からの使いにみすぼらしいとかなんとか言われるのよ」

「そういう人、結構来るの？」

「私の父が昔朝廷で官吏をしていたのでその関係で時々ですが…」

「ふんっ！優秀な官吏だった董君雅様がいなくなったおかげで今の地位にいる癖に嫌みを言う為にわざわざ来るなんてとんでもない馬鹿共よ」

「…ホントに腐ってるな」

怒りを通り越して呆れ返る、そんなに暇で涼州に来る位なら仕事の一つでもしろと言いたくなる

「北郷さん、どうぞ入って下さい」

「鈍くさいわね、早く降りなさいよ」

「え？あ、あぁごめん」

今憤っても仕方ない、とりあえず中にいくか…

◇◆◇◆◇◆

中に通された俺はとりあえず応接室らしき部屋へと通された、

董卓ちゃんと賈駆はお風呂と着替えに別行動

（森の中を走り回ったのだから仕方ないよなぁ、でもこういう所に一人って何か嫌だなぁ…）

偉い人向けの部屋で一人、緊張しない訳がない

（しっかし困ったな…）

ちょっとトイレに行きたいのだが場所が分からない…

（ま、いっか、廊下に行けば侍女さんか誰か位いるだろうし）

で引き戸を開けると

そこに何故か壁があった

（あり？扉開けたよな？）

少しずつ視点をあげていくと…

そこには俺より一回り二回り以上もでかい巨漢のおっさんが立っていた

「おおおぉぉぉっ！？」

「おおっ、すまんね」

「え、お、だ、誰っ！？」

いや、この顔すっげぇ見覚えあるんだけど！！

「いやいや、申し訳ない、私は董君雅、月と賈駆君から聞いているだろう？」

「え？あ、貴方が董君雅さん？」

「いやいや、娘達が世話になったね、さ、立ち話もなんだし座って話そう」

「え、あ、いや、それはそうなんですが…」

「ん？」

「あの…厠何処ですか？」

◇◆◇◆◇◆

で、用を済ませて董君雅さんと二人きりの部屋改めて董君雅さんの

顔を見てみる

…見たことある、ていうかねぇ…

顎の下からもみあげまで伸び、口まわりまでびっしりと生えそろったヒゲ、目つきは鋭く、

体格は太めだがゴツい体型と相まってそれほどでっぷりとしたイメージはない

…いや、ぶっちゃけ董卓？

そう、董卓だ

三国〇双の董卓のイメージをまんま人にした様なおっさんが目の前にいる

いやまぁあそこまで太ってはいないが筋肉質とは言い難い程よさだ

「いやいや、落ち着いたかい？」

「あ、はい、すいませんでした」

「いやいや、私の方こそ用足しの邪魔をして悪かったね、娘達の恩人に早く会いたくてね、でも私一人だけだと会ったことがない人間と二人きりになってしまうだろう？それじゃああまりにも気を使わせてしまうからね、だから月達を待ってたんだが…」

「あ、いえ、別に苦じゃないですし、そこまで気を使ってもらわなくても…」

「そうかい？なら良かった、…おーい！誰かいるかーい！！」

「何事だ！主殿！」

ドカーン！と扉をぶち破り誰かが中へと飛び込んできた…ってえぇ！？

「あぁ、華雄ちゃん、ちょうど良かった、侍女の娘達に料理を頼んでたんだけどちょっと様子を見てきてもらえるかい？」

「ふむ、了解した、して主殿、そちらのお客人は？見た所都からの使いではなさそうだが？」

「それがね、…かくかくしかじか…」

「なるほど、まるまるうまうまという訳か、お客人、我が名は華雄、この街の警備を担当している、董卓殿の恩人ならば丁重にもてなさなければな！今運んでくる、待っていてくれ！」

「あ、いや、そんな気を使わなくても…」

「すぐ戻る！」

ズドドドドドっと足音と扉『だったモノの残骸』だけを残し、華雄

さんは走り去った

「いい娘だろう？」

「いやまぁ、いい人ではあったんですけど扉…」

「ハッハッハ！元気なのもあの娘の良い所だよ、それに私の事を心配して急いで来てくれたのに咎めたりしたら可哀相だろう？」

…スゲェ…この人、顔は董卓似だけどすげぇ優しい…

「いやいや、食事まで時間を潰そうか、少し話したいんだけど良いかな？」

「え？あ、はい」

「いやいや、悪いね、年寄りの戯言だと思って少し付き合ってね」

「いや、そんな…」

「ふふ、そんなに気兼ねする必要ないさ、…さて、話の前にお礼を言わないとね、二人を救ってくれた事、どれほど感謝しても足りない、本当にありがとう」

「あ、いえ、そんな…」

「君がいなければ大切な家族の身が危なかったんだ、君は誇って良い、むしろそうしてくれないと救われた側に立つ瀬がない、君の姿

勢は美徳だけど、いき過ぎは良くない」

「っ、はい…」

そうだ、これは礼儀、恩に対して礼を返すのはこの国では当たり前、受けてもらえないと大変な恥に当たる、つまり俺が断っては相手を辱める事になる、ここはおとなしく受けておこう、お金なら南へ向かう路銀にすれば良いし、この街で馬や食料を買えば少しは還元したことにもなる（と、自分に言い訳してみる）

…いや、正直言えばお礼と言われて嬉しくない訳がない、自分の行いに対し、相応の対価が支払われる、それはまさにこの世界に来て教わった『人間らしく生きる』という事の体言のように思えるのだ

…こう思えるようになったのも華琳のおかげだよな…きっと現代で普通に生きていたらこんな考えしなかったろうし

「すいませんでした、ありがたく受け取らせてもらいます」

「うんうん、それで良い…って、助けてもらった側が何偉そうに説教してるんだか、良しと、お礼お礼…」

さらさらと紙（竹簡ではない高級なもの）に何かをしたためる董君雅さん、一枚書いて更にもう一枚

「…良し、これが私からのお礼の品だよ、受け取って欲しい」

なんだろう、通行手形か何かだろうか？

「ありがとうございます」

で、俺は内容に目を向けた…

◇◆◇◆◇◆

…おかしい、絶対におかしい

「どうしたのだ北郷、難しい顔をして？」

「むしろ俺は何故華雄さんがそんなのほほんとしてるのかが不思議だよ…」

「何故だ？」

…さて、俺は今華雄さんと一緒に馬を歩かせているのだが何故こんな事になったのかちょっと回想してみる

……

……

…

『…良し、これが私からのお礼の品だよ、受け取って欲しい』

『ありがとうございます』

で、内容に目を通す

任命書

××群県令に任命す

『……え？ちょ！これ！』

『北郷殿、君に県令の地位を与える』

『そんな！いくらお礼だからってマズイでしょ！』

『いやいや、ちょうど都から派遣された県令の席が『空いた』からね、聞けば警備に関して素晴らしい案を出してくれたそうじゃないか！大丈夫、君ならできるよ！』

『いやいやいや！できるかできないかって話じゃなくて…』

『もちろんちゃんと都には正規の委任状は送るから心配いらないよ、でも街や村の人達との折衝が少し心配かな…前の県令のせいであまり良い印象はないだろうし…』

『いや、あの、董君雅さん？』

『…やはり人心の安定までは賈駆ちゃんにもついてもらった方が良いね、護衛の武官は誰が良いかなぁ…あまり強面な人は良くないしねぇ…華雄ちゃん辺りにお願いしようかな』

…聞いちゃいない

『あ、そういえば正規の書簡を送るのに名前が要るんだけど北郷君は姓が北で良いのかい？』

完全に俺の存在ガン無視ですな

『俺、北郷が姓なんですけど下の名前は真名みたいな物なんでそれは…』

『それは困ったなぁ…』

ヨシッ！…あわよくばこのまま断って…

『じゃあ私の養子という事にしよう、名前はどうしようか？』

『……』

この人、けっこう強引…

『董耀？董旻…董白…じゃあ女の子っぽいかなぁ…』

…早く意見しないと勝手に命名されそうだ、仕方ない…

『……董操、ってどうでしょうか？』

『董操か、うん、なかなか良いじゃないか、じゃあ董操にしよう、今日から君は董操北郷だよ』

董君雅さんはさらさらと書簡に名前を書き込んだ

……

……

…

うん、何故こうなったのかは一欠けら程もわからなかった

後から色々聞いてみたがどうやら賈駆が俺をどうしても引き留めろと聞かなかったらしい

俺一人を失うと国の損失がどうの、他国の勢力がどうの、なんて話になったらしい、なんとも分不相応な事を言われたみたいだが本人に言うと…

「あんた、自分の価値が分かってないわね」

なんて言われる始末だ、俺の価値？華琳の傍にいた頃なら天の御遣いなんて肩書きがあったからいるだけで価値はあったろうが今はちょっとだけ人より強い一般人だからなぁ…

「ちょっと北郷！何やってるの！」

「え？あ、すまん！」

「あんた何やってんの！ぼーっとしてないで早く馬進めなさいよ！」

「うへぇ…おっかねぇ…」

急いで馬を早めると隣に華雄さんが寄ってきた

（気をつけろ、怒った賈駆は私より怖いぞ）

（マジですか？）

（うむ、私でも逃げたくなる位怖い）

（げぇ…マジかよ…）

「そこ！おしゃべりしてないで！あんた少しは董君雅様に任命された県令だって自覚もちなさい！」

「…はい、すいません…」

…確かに怖い

隣で馬を進める華雄さんに一瞬視線を送り、一刀はこれから起こるであろう事態を想像し、前途多難という言葉を噛み締めるのだった

◇◆第三話◆◇（後書き）

寸劇†無双

「今回の司会進行は月と詠を交えまして三人でいきたいと思います！」

「別にあんたはいらないわよ？」

「そりゃないよ詠！俺、活躍スペースここにしかないんだよ！？追い出されたら行き場がないんだよ！？」

「前回（※二話あとがき参照）あれだけ月に迷惑をかけておいてそんな態度でいられるあんたが僕は殺したい位嫌い」

「すいません許してごめんなさい申し訳ありませんでした、だからその両手で抱えた人を撲殺できそうな分厚い辞書を閉まってくださいお願いします」

「詠ちゃん、許してあげよう…一刀さんも反省してるみたいだし…」

「おぉ！月ちゃん…なんと慈悲深い…（人）ナムナム」

「…大丈夫ですよ、次やったらその白くてキラキラする服は真っ赤に染め直されますから…♪」

「うひぃ！？（お、怒ってらっしゃるぅ！？）」

「怒ってないですよ♪ただ次がないだけです…♪」

「…北郷、月、本気よ？」

「ハハッ…ソウダネ、オレ、ハンセイスルヨ…」

次回予告

北郷一刀の向かう街、そこは悪政の成すがままの荒んだ街と化していた

民達は一様に力無く、新たな為政者に対し敵意しかもたぬ者ばかり

「この街にあんたらなんかいらへん、とっとと失せ」

そしてそこにはかつて愛した大切な者、張遼の姿があった

悪政に喘ぎ、嘆く民の為、立ち上がった彼女は北郷一刀へとその刃を向ける

（霞…）

大切な者に向けられた刃に北郷一刀は何を思うのか…

『天・恋姫†無双～願わくば君との時間を～第四話、張遼、仁の為に立ち、一刀、彼女の思いを受け止めんとする』

◆◇◆◇◆◇

「…霞、あんなカッコイイ役どころなの？」

「ホントはただの戦闘狂なのにね」

「いやいや、でもさ真・恋姫†無双でも悪党三人からおっちゃんを守るシーンがあったしさ（※張遼伝1参照）」

「でもね～、仁によりってキャラじゃないわよね～、酒さえあれば生きていけるタイプだし」

「実は代金は酒払いとか」

「…え、詠ちゃん…！、一刀さん…！」

「どうしたの月？」

「二人してやけに楽しそうやな…何の話しとるん？」

「え、し、霞っ！？」

「な、なんでここにいるのよっ！？」

「じゃっかぁしいわ！んなことどうでもええねん！！二人してそこに座り！！」

「「は、はいぃ！！」」

「えぇか、あんたらウチの事小馬鹿にしとったけどそもそもウチは…クドクド」

「…えと、一刀さん達は霞さんのお説教が続きそうなので私が締めちゃいますね、それではまた♪」

寸劇†無双　終

◆◇第四話◇◆

「おいおい…、こりゃ凄すぎるだろ…」

「凄まじいわね…」

「ふっ！この程度私の戦斧ならば一撃で打ち砕ける、やるか北郷？」

ジャキッっと戦斧を構える華雄さん

「駄目だよ華雄さん、一応俺達県令代行できてるんだからさ…」

「しかしこれでは中に入れんぞ？」

…そうなのだ、やっとこさ辿り着いた隣の街、そこはまるでこれから戦場にでもなるかの様に瓦礫や材木などで高いバリケードをされていたのだ

「…確かにそうね、少し強引でもそれが良いんじゃない？」

「賈駆までんなこと言うなよ…おーい！誰かいないかーっ！！」

「…誰だ？」

山の上から人の顔が出てきた

…声を掛けずに山を崩してたらあの人…

…声掛けて良かった…

「なんでこんなに入り口が凄い事になってるんですか？もしかして戦が始まったとか…」

「…戦？確かに戦だ、宦官と俺達とのな」

「宦官との？」

「あぁ、この街は宦の奴らの指示はもう受けねぇ、俺達から散々金をむしり取ってた太守の野郎も街から追い出した、もう俺達は自由だ、これからは俺達自身の手で街を治めるんだ」

（董君雅さんが県令の席が空いたって言ってたのはそういう事か…）

「オメェさんら見ねぇ顔だな、いったい何しに来たんだ？」

（賈駆…どうしよう？）

（ここは出直した方がいいわ、私達が派遣された新しい県令だなんて知れたら殺されるわよ！？）

（…了解、じゃ…退却って事で…）

「我等はこの街に派遣された新しい県令だ、街に入りたいんだが通らせてもらえないか？」

「「なっ！？」」

「ちょ！！ちょっと華雄さんっ！！」

「ん？どうした北郷？」

華雄さんは分かっていないのかこっちにしきりに疑問符をとばしてくる…

賈駆は既に頭を抱え、しゃがみ込んでいる…

…あぁ、終わった…

「派遣された…県令だと！？おい！！みんな！！出て来てくれ！！敵だ！！」

「「「おうっ！！」」」

わらわらと現れた十数名の街人はそれぞれ武器を持ち、こちらを睨みつけてくる

「ちょ、ちょっと待ってよ！！俺達別に戦いにきた訳じゃないんだ！」

「…あんたら宦吏のせいで散々苦労させられたのに、またあんたらは俺達を苦しめる気か…あんたらにやる理由がなくたってこっちにはあるんだ！」

「…そう、だよね…ごめん、俺達がしっかりすればみんな苦しむ事なんてなかったのに…本当にごめん！」

頭を下げる、俺がした事じゃない、でも彼等にとって俺は苦しめた側の人間だ、謝るだけで許されるとは思わないけどそれでも謝らなければいけない

「あ、謝って済むと思ってんのか！」

「そうだ！！おまえらのせいで俺達苦しんだんだ！」

「…分かってる、謝って済むなんて思わないよ…だから俺達は帰るよ、前の宦吏が集めてた金品は街の人で分けてよ」

「か、帰す訳にはいかねぇ！帰したりしたら大勢兵士を連れて攻めてくるに決まってる！！」

「そうだ！この場でぶち殺せ！！」

「逃がさねぇぞ！」

「そんな真似しないわ！！僕等はこのまま帰ってあなたたちに街の自治を…」

「宦吏の言葉なんか信用できるか！」

「…っ！」

周りがじりじりと距離を詰めはじめる

（賈駆…）

（な、何よ、今それどころじゃ…！）

（俺、悪いけどこんな所で死ぬ気はない、…剣、抜くよ？）

（…仕方ないわ、僕だって月を王にするまで死ねないもの、華雄将軍、頼むわ）

「任せろ！」

ドンッ！っと地面に戦斧を突き立て仁王立ちする華雄さん

「さぁ！誰からくる！！私に勝てると思うならば掛かってこい！！」

周りを睨み据えた華雄さんの殺気に間合いを詰めていた人々が躊躇した

「ふん！まともに戦えもしないくせに私の前にでてくるな！」

「ふっ、ならば私が相手をしよう！！でやぁぁぁ！！」

「なにっ！？ぐっ！？」

瓦礫の頂から落下の速度を利用し振るわれた一撃を頭上に翳した戦斧で受け止める華雄さん

よほど重い一撃なのか華雄さんの足元が陥没し、周りに皹を走らせた

そしてすぐに正体は知れた

その白い服の女性を俺は知っている
彼女が戦場を舞う様を俺は過去何度となく見たのだ

彼女の名は

『趙雲　子龍』

蜀の誇る勇将が何故ここに…

そうか！まだ歴史的には黄巾よりも前だからまだ劉備さんに仕えてないのか！

「ふっ…なかなかできるようだな」

「貴様！不意打ちなど卑怯な真似を…！」

「ふっ…なに、相手に息巻いているからどれ程腕が立つのか試してやろうと思ってな」

「き、貴様ぁっ！！」

掲げた戦斧を振り回すように一撃を放つ華雄さん

風を切る音が周りに響く

「ふっ！」

後方に跳んだ趙雲さんはまるで風に流れる様に宙を一回転し着地する

「なかなか鋭い一撃を放つものだ、名を聞いておこう、私の名は趙子龍」

「我が名は華雄、涼州隴西群臨県の太守、董君雅一の家臣、華雄だ！」

戦斧と槍が低く構えられた

それは互いの殺気を爆発させる為に溜めているようなそんなイメージ

「…いざ」

「尋常に…」

「「勝負っ！！」」

突っ込んだのはほぼ同時、華雄さんは下段からの薙ぎ払い、趙雲さんはそれを弾き返し槍を突く

右に左に槍の連撃が繰り出され、華雄さんの方はそれを石突きや刃で受け流す

だがこの展開はマズイ、

重量の比重が重い分一撃の威力は華雄さんが有利だが速度では趙雲さんが圧倒的有利、華雄さんがジリジリと後退している

「ふっ、この程度とは拍子抜けだな」

「な、何だとっ！！ぐっ！？」

突きが一段と激しくなり、雨のような連撃で華雄さんを襲う、完全に防戦一方

更にマズイのは周りが趙雲さん有利とみて少しずつ間合いを詰め始めてる事、俺一人で賈駆を守らないといけない

（賈駆、俺から離れないでくれ）

（え？ちょ、ちょっと！？）

賈駆を背に密着させ、左側の壁まで後ずさる

右手側の一人が鍬を振りかぶったのを見てその腹に突きを打ち込む

「ぎぇ！」

どうっ、と倒れた男の様子に他の人間達は怯んだ

その間位置をずらし路地へと賈駆を誘導する

「…ここなら…！」

多分天秤棒だろう、長柄の得物を振りかぶった男が突っ込んできた

「うおぉ！！」

「はっ！！」

パァン！と激しく打ち合わせ、突くように相手の手首を打つ

「いづっ！！」

手首を打たれ取り落とした武器はすぐ賈駆の方に蹴っておく

…細い路地だ、一人が攻めに向かうと他は通れない、無理をすれば二人通るかも知れないがそうなれば武器を振り回すなど以っての外だこうなればこっちが有利、一対一ならこっちはある程度立ち回れるのだ

…後は華雄さんが趙雲さんに勝てるかどうかで話は決まるのだが…

「くそぉ！宦官は死んじまえ！！」

「…せぃっ！！」

振り上げられた上段を無視して一気に踏み込み突きを打つ

「ぎっ！！」

鳩尾を抉る一撃に一瞬揺らいだ麺打ちの棒を斜めに打ち上げ手から叩き落とす

「ひっ！」

「武器のない奴はくるな！下がれ！！」

「う、うわぁぁ！！」

仲間の身体にぶつかりながら逃げるように後ろに下がっていく

（よし！やれる！！）

このまま正面の奴らを叩いていけば…

「うら！こっちにきやがれ！！」

「ちょっ！は、離しなさいよ！！」

（な！？しまった！回り込まれたっ！！）

迂闊だった！！すぐに路地を抜けるべきだった

「お、おい！そこの！武器を離せ！連れを殺されても良いのか！！」

「…離したらそっちも離せよな」

「ちょ！北郷っ！！」

カラン、と足元に木刀を放り両手を上げる

「よ、よし！お前らも手ぇ貸せ！そいつを抑えろ！」

「「よ、よし！」」

後ろからがっちりホールド

「抵抗はしないよ、だから賈駆…その娘は離せよ」

「け、結局離しちまったら兵を呼ぶんだろ！離すわけねぇだろうが！」

「ひ、卑怯だろ！こっちは木刀離したんだから」

「誰も『武器離したら離します』なんて約束してねぇだろうが！」

「ず、狡いわよ！」

「うっせぇ！てめぇらなんかに従うわけ…」

「げっ！！」

「うがっ！！」

「…え？」

俺を羽交い締めしていた二人が急に翻筋斗（もんどり）打って倒れた

「…一人に寄って集って滅多打ちしといて、勝てんときたら人質とって、挙げ句には約束も果たさんなんて卑怯も良いとこやで」

…雪駄独特の藁を踏み締める音…凜としているが独特の関西弁

振り返ろうとした脇をその人物は抜けていく

「あ…し…」

「兄ちゃん、ちょっと待ってな？あんたにも話す事あるんやけどウチも流石にあれは胸糞悪いわ」

…あ…

「おい！そこのあんた！！」

「なっ！？あ、あんた警備隊の…」

「あんた、今何しとったんや？」

「へ？い、いや…」

「人質なんか取って何やっとるんか聞いとんねんっ！！さっさと答えっ！！」

「ひ、ひぃ！？こ、こいつらが悪いんだ！宦官だからって威張り腐って、俺達から金をむしるだけむしって何にもしてくれねぇ！だ、だから！」

「…へぇ、だからそんな卑怯な真似しても構わん訳や？」

「し、仕方ねぇじゃ…」

「…ふざけんのも大概にしぃ！！」

「ひっ！？」

「ウチはな宦官がだいっきらいや！けど卑怯な真似して平気でいる様な奴はもっと嫌いなんや！！」

地面を踏み締め槍を構える霞…槍？青龍刀じゃない？

「ひっ！？く、くるな！！こ、この女が死ぬぞ！！」

グッと強く頚に当てられた鎌に賈駆が短く悲鳴をあげた

「やめろ！！」

「……れば……えぇ」

「え？」

「あ？」

「したければすればえぇ」

「「なっ！？」」

俺と向こうの男の声がハモった

「お、おいテメェ！！人質がどうなっても良いってのか！？」

「そ、そうだよし…張遼さん！」

「どうなってもえぇ何て言ってへん…ウチは『そいつがその娘を怪我させるより早く殺れる』言うとるだけや」

…本気だ、霞は本気で怒っている…あの男は張　文遠の逆鱗に触れたのだ

「んだと…」

ヒュン！！

「…え？」

賈駆の髪が数本ハラリと落ち、首に当てられていた鎌の柄から先が消失していた

いつ突いたのか相手は理解できなかったのだろう、手の中の鎌『だったもの』を見て驚愕している

チャキ…

「…で、まだやるんか？」

「う、うわぁぁぁぁ！！」

賈駆を突き飛ばし脱兎の勢いで逃げ出す男、のびた二人は霞の手によって簀巻きにされている

「うし！で～けた♪完璧やん♪」

「え～と、あの張遼さん、その簀巻きどうするおつもりで？」

「河に放る」

「駄目！！それ死んじゃうから！！」

「アハハ♪冗談やって♪一応こんなんでも同じ街住んどるんやしそこまではせぇへんよ」

（そこまでって…どこまでならする気よ…）

「んで、あんたらがこの街に派遣された新しい官吏なん？」

「あ、はい、…といってももう街の人達に拒否されちゃったんで帰るつもりなんですけど…」

「…あんた、変な奴やな」

「え？」

「なんで力押しで居座ろうとせぇへんの？それくらいできるだけの権限あるんやろ？」

「…確かにこの状態を見たら何とか手伝いたいと思うけど…この街に官吏は必要ない、俺達が手を貸す事を街の人達は望んでない…」

悔しいけど事実、この街の住人達は自分達を敵としか思ってない、手を伸ばせば払いのけられるのが現実

「手伝いたいって本気で言うとるんか？」

「…少なくともそこの馬鹿は本気よ」

「えぇ～…馬鹿とはなんだよ馬鹿とは～…」

「うっさい馬鹿！！」

何故怒られたっ！？

「あんた、ホンマに変やなぁ」

こっちからは変人発言！？

「でも、ウチ、あんたなら信用できる気ぃするわ、な、良ければウチが街の連中説得するんに手ぇ貸したろか？」

「本当？そうしてもらえると助かるけど…」

「ただ、今この街の連中を口で説得するんは無理や」

「じゃあどうするのよ？」

「口で出来んなら力ですればえぇ、ウチと勝負してあんたの力をみ

んなに認めさせるんや」

「…俺が？張遼さんと？」

「正直ウチもまだ官吏が信用できるとは思われへん、でもあんたはちゃう、本気でみんなの為になんかしてあげたい思とる、それを見せてやれば連中だって納得するやろ？」

…どうする…？相手はあの張　文遠、俺なんかに勝てる訳が…

「もちろん手加減くらいしたる、槍やのうてこれなら良いやろ？」

ひょいっと転がっていた天秤棒を拾いあげる

棒くらいなら勝ち目もあるかも知れない、…よし

「…分かった、勝負しよう、張遼さん」

「うっし！なら決まりや、頼むで…え～と…」

「そういえば名乗ってなかったね、俺は董操　北郷、北郷って呼んで」

…本当なら『一刀』と呼んで欲しい、だが今はそれも叶わぬ願いか…

「北郷…、変わった名ぁやね、ま、えぇわ、よろしゅうな、北郷♪

ウチは張遼　文遠や」

「よろしく、…張遼」

「よっしゃ、じゃ、表いくで」

「…うん」

◇◆◇◆◇◆

裏通りから戻ってきた俺達の視線は一つの光景に釘付けにされた

「すっかり忘れてた…」

「華雄将軍…まだやってたの…？」

そうなのだ、華雄さんはまだ趙雲さんと勝負していた

「ていうか、状況逆転してる？」

「はい～、最初は星ちゃんが押してたんですけどね～、あのお姉さんの体力についていけなかったのですよ～」

へ？

「しかしあの銀髪の女性もそろそろ限界でしょう、細かい傷も増えれば著しく体力を消耗します、互いにもってあと数合…」

え？あ？

…恐る恐る角の家の軒下に視線を向ける

そこには瓦礫に腰掛ける女性が二人…

予想しておくべきだった…趙雲さんに会った時点で彼女達が一緒にいるのを、だってそうじゃないか、初めて会った時彼女達は一緒にいたのだから…

「き、君らは…？」

「風は程立と申します～」

「私は今は戯志才と名乗っております」

…あの時と一緒だ、風はまだ程立のままで…稟は偽名を名乗ってて…

「…初め…まして…程立さん…戯志才さん…お、俺は董操　北郷…北郷って呼んで…」

ダメだ…声が震える…

「ん～…、お兄さんは何故泣いているのですか？」

「…いや、目に砂埃がね…入ってさ…」

あからさまに怪しい言い訳だ

「埃ですか～、大変ですね～、大丈夫ですか～？」

それでもマイペースに話を合わせる風

「風、北郷殿、そろそろ決まりますよ」

今まであれだけ激しく打ち合っていた二人が距離を空け、互いに一定のリズムを取っている

…双方無事ではない、華雄さんは細かい裂傷が無数にあり、特に右腕中程の切り傷が深そうだ、既に戦斧を振る役には立たないのかだらりと下がったままにしている

対する趙雲さんも腕が小刻みに震えている、先程の風の話通りなら勢いがなくなってきた辺りで華雄さんの反撃を受けたのだろう、力が入っていないように見える

風が吹き抜け、二人の荒い息遣いのみを伝えてきた

「…もう、互いに限界のようだな」

チャキ…っと槍の穂先を地面スレスレで構える趙雲さん

「ならば決着をつけるぞ趙雲！」

かたや戦斧を左肩で担ぎ必殺の構えをみせる華雄さん

「ふっ！望むところだ華雄！！」

「うおぉぉぉぉ！！」

「でやぁぁぁぁ！！」

踏み込みは華雄さんが一歩早い、趙雲さんがほんの少し出遅れた

華雄さんは左腕一本での一撃とはいえあれは致命的…

違う

今見た

趙雲さんが笑みを浮かべるのを

勝てるという確信に満ちた笑みを

「華雄さん！ダメだっ！！」

踏み込んだ華雄さんは既に横薙ぎのモーションに入って止まらない

対する趙雲さんは直線、故に一撃の速度が桁違いに速い

狙いはカウンターか！！

華雄さんは止まらない、いや、危険を理解した上での一撃だ

「うぉぉぉぉ！！」

「でやぁぁぁぁぁぁ！！」

交錯

互いの姿がグラリと揺らいだ

片膝を付いたのは華雄さんは脇腹を抑え、苦悶に表情を歪めている

対するは槍を支えに立ったままの趙雲さん

…趙雲さんの勝ちか

「私の勝ちだな、華雄殿」

「あぁ…私の負けだ…」

「早く手当を受けるといい、その怪我ではまともに動けないだろう？風、手当をしてやってくれ」

「な！？私は…」

「刃は己の想いを映す、少なくとも貴公の刃からは悪意を感じなかった、民の為とはいえ先の数々の非礼、詫びさせて頂こう」

頭を下げる趙雲さん

「私の方こそ貴公のおかげで目が覚めた…私は驕っていたようだ、武を極めんと努力し、己が周囲に敵になる者がいなくなってもう高みへと至ったつもりになっていたのだ…」

「いや、あれは驕りなどではないだろう、最後の一撃、最初から私を真っ二つにする気で振ればそなたの勝ちだったではないか、わざと一歩分深く踏み込んだから私の槍が速かった、もう半歩でも遠ければ勝負は分からなかったはず」

「いや、貴公こそ真っ直ぐに心の臓を狙えば私の戦斧が届く前に仕留められただろう、どちらにしろ負けたのは私のはずだ」

「あの～…」

「うむ？」

「どうした北郷？」

「お互いの健闘を讃え合ってる所悪いんだけど…早く治療受けた方が…」

「む、確かに華雄殿の手当をせねば…」

「趙雲さんもだよ」

「む？私はそれほど酷い傷は…」

「右腕、今、上がらないでしょ？折れてるんじゃないかな？」

「折れてるなど大袈裟な、ただ少々反応が鈍いだけで…」
「それ、輝が入ってるんだよ、添え木して動かないようにしないと…」
近くにあった桟木を二本、伸ばした右腕の脇の下とその反対に当て包帯を巻く、応急処置だが無いより随分マシだろう
「うっ…」
「ごっ！ごめん！痛かった！？」
「あ、いや…大丈夫…だ」
「すぐ済むからもうちょっと我慢して」
「あ、あぁ…」
「……よし、こんなもんかな、後はあんまり動かさないようにして、完治しないうちに無理すると余計酷くなるからさ」
「あ、ありがとう…」
「うん、…張遼さん待たせちゃったね、じゃ早速勝負…って、なんでそんなにだれてるの？」
「な～んかうち勝負する気ぃ失せても～た～、本当に北郷って官吏な～ん？」

「いや、そんなジト目で見られても…一応そういう立場できた訳ですから…」

「え～、嘘や～」

「いや、そこ否定されても…というか俺勝負してもらえないと困るんだけど…街の人に納得してもらえないと…」

「あ～、えぇ、えぇ、うちが後でやったるから今日はもう戻り」

「で、でも…」

「あ～んな覇気のない顔で人の手当てしとる奴と喧嘩なんかできるかぃ！えぇっちゅうとるんやから素直に受け！！」

「はいぃっ！！」

「うし、ならこっちはうちらに任し、なんとかできたら早馬でも何でも送ったるから、…うちは北郷、あんたを信用したる」

「…うん、ありがとう張遼さん」

「張遼さんやのうて霞って呼んでくれへん？」

「真名を…預けてくれるの？」

「言ったやろ、信用したるって」

「…ありがとう、俺は一刀、一刀って呼んでくれ」

「おおきに、一刀…」

「霞…街の人の件よろしく頼むね」

「おう♪任しとき♪」

「…それじゃ、戻るね」

華雄さんと趙雲さんも別れの挨拶をしている

「華雄殿、お互い傷が癒えたら再戦といかないか？」

「望むところだ！！再戦、楽しみにしているぞ！！」

別れの挨拶…？というか体育会系なノリてがっちりと握手を交わしている

「さらばだ趙雲！」

「あぁ、次に会える日を楽しみにしている」

「賈駆殿、復興支援の件、よろしくお願いします」

「えぇ、すぐに手配する、ただ兵の格好じゃ送れないからあなた達の伝手で…」

賈駆と稟も仲良くなったのか随分と話し込んでいる

「賈駆、華雄さん、そろそろ行こう、みんな、それじゃまた」

「はい～、お兄さんもお元気で～」

「ほなな～」

あの時の始まりの出会いとは違う、新たな出会い、これがいったい
これからの未来を変えるのか…

◆◇第四話◇◆（後書き）

寸劇†無双

「どうも、寸劇†無双担当北郷一刀からいきなりのお詫びです、霞が予定されていた戦闘シーンが華雄と趙雲に持っていかれた件について深くお詫び申し上げます」

「なんで華雄と趙雲の試合の後やらせなかったの？試合さえやらせればあの台詞だけならいけたんじゃないの？」

「長々と戦闘シーン書くのが苦手な作者は戦闘シーンをはしょりましたとさ、ちゃんちゃん♪」

「シネ」

「オレワルクナイ、ワルイ、サクシャ」

「なんで片言なのよ…」

「まぁまぁ、…実際に霞との仲間フラグ楽しみにしててくれた方大変申し訳ありませんでした！かわりに趙雲×華雄フラグ立てましたからご勘弁を！」

「…それ喜ぶべき？」

「で、俺を混ぜてのさ…」

「言ったら殺す」

「あの…そろそろ予告しませんか…？前みたいな事は無しにして書かないとあとがきで嘘ついただけになっちゃいますし…」

「よし！では次回予告！！」

次回†予告

復興支援の為、人や食料の手配に忙しく動き回る一刀達

気晴らしに歩いた街で一刀が偶然出会った人物は自分達の運命を左右する最強で最恐の人物だった…

「……お腹…空いた…」

次回『天・恋姫†無双～願わくば君との時間を～　第五話　拠点フェイズ？　董家が傾く日！？緋い髪のハラペコ娘！！』

「…ヤバイ…副業しなきゃ…ん？そういえば…」

◇◆◇◆◇◆

「董卓軍で1～2を争う人気キャラの登場、月ちゃんはどう立ち向かうのか！！こうご期待♪」

「…へぅ～、立ち向かったりしないです…」

「あんたは何を期待してるの？」

「月ちゃんとれ〇ちゃんのご奉仕プ……」

「言ったら殺す、ていうか殺す」

「え、いや、冗談…あ、ま！待って！ヤバイ！し、死兆星が見えるうう！？」

「ならあんたは僕にやられる運命！！死ねぇぇ！！」

「またこのパターーーーーーーーーーーーーン！！」

（北郷一刀、地球周回軌道衛星へと昇格）

「悪は滅びたわ！！」

「…詠ちゃん、だんだん強くなってきたね…」

寸劇†無双　終

◇◆第五話◆◇

一刀ＳＩＤＥ

「……という訳で街の自治は一時的にその女性達に預けてきました、向こうから連絡がきたら再度向かいます」

「…宦官と民の戦争、か…哀しいね、民のために力を尽くすべき人間がその民から敵視されるなんて…破壊された建物等の損害状況は？瓦礫を山にできる位は破壊されたようだけど…」

「向こうに居た人物…戯志才と名乗ってたけど彼女の話では宦官、もしくは宦官に関係のある商人達の家で暴動を起こしたみたいで一般の建物にはほとんど被害がない、ただ、暴動に参加した１０代～２０代の男達がみんな行方不明になったって言ってたからある程度若い人手が欲しいのは確かね」

「ならすぐに手配しよう、早速明日の朝にでも向かってもらえるように必要経費は全額こちらで持つ話で良いかな？」

「流石に大工さん達にまで奉仕活動はさせられないですしね、それが良いと思います」

「よし、じゃ、月、そういう事だから街の大工さん達に話を通すようにお願いするよ」

「あの…お父さん、商人さんやお医者さんも手配した方が良いですか？」

「うん、そうだね、そっちも月にお願いするよ、あ、あとそれからみんな、今、いなくなった若者達がどんな事をする気か予測がつかない状態だ、この街の治安も悪化するかも知れないからしばらく巡回等の警備を強化して対処しよう、北郷君も警備の方お願いできるかい？」

「主殿、警備なら私が…」

「駄目、華雄ちゃんは怪我を先に治しなさい」

「し、しかし主殿、私はこれしきの…」

「華雄ちゃんが強いのは分かってるし、そんな怪我でへばっちゃう様な娘でもないのは僕が一番良く分かってる、でも今は療養に専念して欲しいんだ」

「し、しかし！」

「まだ君が無理をするような時じゃない、分かってほしい」

「……御意…」

…グッと唇を噛み下がる華雄さん、その様子が気になり俺はそのあとの会議に集中できなかった…

◇◆◇◆◇◆

「…さて、そろそろ終わりにしようか、お昼を食べたら夕飯までは
みんな自由にしていて良いよ」

「あ、はい」

「…北郷さん…よろしければ街にいきませんか…？」

「街に？」

「（…コクッ）…まだ街の様子は不慣れでしょうし…お邪魔でなけ
ればご案内したいんですが…」

「あ、でも俺ちょっと用事が…」

「…そうですか…」

ツカツカと足音が聞こえ

ボグゥ！！

嫌な音を立て脇腹に拳がめり込んだ

「（ぐごっ！？）」

「（あんた月の誘いを断る気…？）」

「（え、あ、いや…）」

「（そんな真似したらあんた……捩切るわよ？）」

「…董卓ちゃん、ちょっと用事済ませてからで良いかな？案内してもらえるとすごく助かる」

パッと董卓ちゃんの表情が明るくなった

「分かりました、お待ちしてます…（ポッ）」

たたっ、と足音を立て走り去る董卓ちゃん…かわいいなぁ…

「月の誘いを断ろうなんて馬鹿な真似させないわよ」

ものすごく怖い顔で睨む賈駆…

「いや、別に断りたかった訳じゃなく…」

「じゃあ何よ？」

「華雄さんだよ」

「華雄？」

「何だか元気なかったから少し気になってさ…」

「仕方ないわよ、華雄の場合、戦うのが自分の存在意義だと思ってるもの、それをやめろって言われたせいでどうして良いか分からな

いんでしょ」

「んでしょって無責任な…もう少し親身になってさぁ…」

「ふん、ほっとけば良いのよあんな筋肉馬鹿、むしろ文官としての仕事を覚える良い機会よ」

「そんな殺生な…う～ん、やっぱ心配だからちょっと声掛けてみるよ」

「ほんとお節介な奴…仕方ないわね…多分華雄は鍛練場にいる、月との約束忘れるんじゃないわよ！」

「ありがとう賈駆！行ってくる！」

「まったく…」

……

……

…

詠ＳＩＤＥ

（…なんであいつあんなにお節介なのよ…盗賊の時もそうだったし…さっきだってあのまま死ぬかも知れなかったのに…）

いや、あれはむしろ運が良かっただけ、あのままならば二人とも死んでいたはずだった

（…って、そういえばあいつにもう二回も助けられたんだ…お礼、きちんと言ってない気がする…）

月と一緒に助けられた時も失礼な言い方してたし、改めてお礼を言っておかないといけない…

「って僕は何あんな奴の事気にしてんのよ！！」

確かにあいつは性格は悪くない、武官や文官としてもまぁまぁ使える…というか文官としてならかなり優秀と言えるだろう…だがあいつは優秀な『駒』…それ以上であってはならない

（…僕があいつを使いこなせれば…月に天下を取らせてあげられる、月にいつでも笑顔でいてもらえる）

その為なら誰かの犠牲など…

（…ただ優秀なら居てくれるだけで構わない…でも優秀過ぎる駒なら…）

…北郷を欲しいといったのは自分だ、責任は自分で取る、今夜、危険と判断したなら…

（月、僕は貴女に天下を取ってもらいたい…その為ならどんな事でもする…）

今夜にでも北郷と話そう、判断はそこでだ

……

……

…

「……ふぅ」

鍛練場の石畳を眺め溜め息をつくのはもう何度目か、既に右手の痛みなどとうに気にならない、ただ今は自分のおかれている状況に納得が出来ないのだ

警備や練兵位片腕だってやれる、主が自分の身を案じてくれたのは理解できるし部下として嬉しくも思う

しかしだからこそ、信頼し任せてくれても良いのではないかとも思う

自分は大丈夫だ、そう言ったのだからその言葉を汲んでくれても良いではないか

ドンッ！

苛苛に任せ石突きで地面を打ち、柄を長めに持ち替えて大きく横凪ぎ、ヒュンッ、と風を切り裂く音が響く

「ふん！片腕でも十分やれるではないか、…よし」

左腕一本でもこれだけの一撃を放てるのだ、ゴロツキに灸を据えるどころか部下の訓練でも余裕でできる

「…よし、主に私がやれるという事を教えてやろう、そうすれば主とて考えを改めて頂けるはずだ」

そうと決まれば善は急げ、流石に今日は戦斧より警棒でいこう、そっちの方が片腕でも扱い易い

隊舎に向かい久しぶりに警棒を取る

「…うむ…軽くて落ち着かんが仕方ないか…」

「華雄隊長ですか？」

突然の声に振り向く

「む？お前は新入りの…今日は非番ではなかったのか？」

「は！華雄隊長がお怪我なされたと聞き交替を志願致しました！ですから本日は…」

「いや、今から私がいこう、わざわざ出てきてもらったのにすまんな」

「し、しかしっ…」

「この程度怪我の内に入らんさ、心配するな」

「で、ですが…」

「久しぶりの休みだろう？人手が足らない分普段忙しいからな、偶の休み位ゆっくりしておけ、ではな」

「あ…」

久しぶりの警棒の感触を確かめつつ外に向かう華雄をその隊員は見送るしかできなかった

……

……

…

「…華雄ちゃんが？」

「はぃぃ…ど、どうしましょう！？」

入ってきた兵士の娘は酷く狼狽しているようで意味もなく足をわたわたさせている

「まず落ち着きなさい、…最近大人しかった不良君達が華雄ちゃんが怪我をしたって聞いてどうやら息巻いているらしいから…そうだね、悪いけど非番の警備のみんなに手を借りて捜索しよう、華雄ちゃんなら通れば誰かは見てるはずだから街の人達に聞いてみる様に指示を」

「は、はいっ！」

「屋敷の中にいる人間は手空きなら使って、許可なら僕から出てるって言えば良いから」

「は！」

……

……

…

「華雄さんいないなぁ…何処行ったんだろ？」

鍛練場や部屋にはいなかった、廊下はくまなく歩いたし、武将の人は良く食べるの法則に従い調理場なんかにも行っては見たが何処にもいない

「屋敷の中にいないのかな？華雄さんもしかして屋敷の中とは別に自分の家持ってるとか？」

考えればそうか、華琳の様に城持ってて側近の仲間とは同居、なんて形が珍しいのかも知れない

「参ったな、その辺り董君雅さんにでも聞く…」

「おぉ～い！北郷くぅ～ん！！」

「ん？あ、董君雅さんちょうど良か……えぇぇ！？」

ガッシャガッシャと音を立て走ってくる巨体…もとい董君雅さん

その巨体に胸当てと具足をつけ、背中には弓と剣を背負い、腰にも剣を下げている

「ふぅ、やっと見つけた、いやいや屋敷中探しちゃったよ」

「え、あの、董君雅さん、その姿でどちらに…？というか俺にご用ですか？」

「うん、実はね華雄ちゃんが警備の仕事に行くって出て行っちゃったらしくてね、連れ戻しに行こうと思ってね」

「……その重装備でですか？」

「こう見えて実は弓には自信があってね、あ、もちろん鏃は潰してあるから当たっても物凄く痛い程度で済むから大丈夫」

「…ちなみに物凄いってどの程度」

「当たり所が悪いと骨折するよ」

いやいやいや、それ物凄く痛い程度で済まない…

「一応の護身用だから気にしないで」

「…はあ、で俺にご用っていうのは？何となく予想できますけど…」

「多分予想通りだよ、じゃあ行こうか、一人より二人の方が見つけ易いしね」

あぁ、やっぱり…

「分かりました、んじゃ俺部屋から木と…」

「良し、急ごう北郷君！」

ガッシと俺を小脇に抱え、えっほえっほと走り始める巨体…もとい董君雅さん

「あ、いや！俺木刀…！」

「大丈夫！僕の剣貸すから！！」

「い、いや、違っ！！うおぉ～～！！ぉお！？おぅ！？おぅ！？おぅ！？」

「口は閉じた方がいい、舌を噛んだら痛い」

走る董君雅の脇に抱えられているためゆっさゆっさと上下運動が加わり脳が揺さ振られる

そしてかっくんかっくん北郷の首を揺さ振りながら廊下を猛進する董君雅、その縦横に大きい見かけとは裏腹になかなか足が速い

おかげで今にも意識が飛びそうだ

揺れる視界の中、玄関を突破したのはかろうじて理解できた、一瞬扉の開閉の為に止まったし

だが休憩はほんの一瞬、また物凄い揺れが身体を襲う

「お、おおぉぉぉぉぉぅ…！お、お助け…」

「華雄ちゃーーーん！！何処だーーーい！？」

ドドドドドッ！！

俺の声なんか聞いちゃいない、まるで戦車の如く門に向け突進を開始するオッサンとそのオッサンに引き摺られる俺

…既に頭は董君雅式の強烈なシェイクで限界突破寸前、す、既に吐き気が…

「おや？董君雅様！そんなに急いで何処にいくんだい？」

「おぉ！おばちゃん良い所にいてくれた！！」

ずざざっ！と砂煙をあげ急停止…た、助かった…

「何言ってんだい！あたしの店は董君雅様が赴任してからここを動いちゃいないよ！」

大笑いする八百屋のおばちゃん

「それどころじゃないんだよおばちゃん！大変なんだよ！華雄ちゃん見てないかい！？」

「華雄ちゃんなら裏通りでゴロツキが暴れてるって聞いてすっ飛んでいったよ、大丈夫かねぇ…怪我してたみたいであたしゃ心配だよ…」

「ありがとうおばちゃん！北郷君！急ぐよ！！」

「あ…はい、あとは俺も走りま…うげっ！！」

襟を後ろから掴まれ海老反りで背面疾走させられる俺

「ちょ！まっ！無理！！無理ですから！？首！首しまっ！！うぐぇ！！」

「待ってろー！！華雄ちゃーーーん！！」

…華雄さんに会う前に俺、死ぬかも…

……

……

…

？？？ＳＩＤＥ

「よくもまあここまで集まったものだ、私が腕を怪我した程度で余程調子付いたらしいな？」

裏通りにこういった手合いが集まるのはままある事では有るがまさか徒党を組んで私を待っているとは思わなかった

どうやら表の通りで私を裏通りに来させた男はこいつらの仲間だったらしい

だが所詮ゴロツキはゴロツキ、片腕だからといって負けるつもりは毛頭ない

既に背後には十数人のゴロツキの山、思い切り打ち据えたから腕や足は折れているかも知れないが死んではいない（はずだ）

「おい誰だ！怪我して弱ってるから今の内に叩こうなんて言い出した馬鹿は！！」

「テメェだって乗り気だったじゃねぇか！！」

…ついには仲間割れか

「私が弱ってるだと？ふん！この華雄、腕の一本や二本もがれたとて貴様ら程度にやられるものかっ！！」

周りの雑魚が私の一喝で既に及び腰になっている

このまま全員牢屋送りに…

「う、動くんじゃねぇ！！」

「む？…っ！？……貴様…っ…！！」

「へ、へへっ…て、てめぇがわりぃんだぜ！散々俺らを目の敵にしやがって！！おいガキ！！大人しくしやがれ！！」

「嫌なのです！！離すのです！！」

「てめぇ！！死にてぇか！！」

ゴロツキが首に当てた剣が肌を浅く薙ぐと小さな悲鳴を上げ暴れるのを止めた

「華雄！！その武器を離しな！！ガキが斬り殺されても良いのかっ！？」

「ちっ…その子供には手を出すなよ…」

カランッと乾いた音を立て投げ捨てた警棒を蹴り飛ばす目の前の男（ゴミ）

「へ、へへ…流石はこの町1番の甘ちゃん野郎に仕えてるだけは有るぜ、ガキを人質にしたら無抵抗かい！！大した甘ちゃんだ！！」

「…っ！！貴様ぁ…我が主をっ！！」

「抵抗しても良いぜ、このガキが死ぬけどな！！」

「…く…！！…抵抗などしない…好きにすれば良い…」

「へっ、なら今までの借りは返させてもらうぜ、おい！このガキ抑えとけよ！！…オラッ！！」

腹に深々と食い込む拳に思わず倒れ込みそうになったが踏み止まり殴った男を睨み返す

「…生意気な面しやがって…てめぇら！！てめぇらもさっさと手伝いやがれ！！」

たたき起こされた数人がのろのろと起き上がる

…これは…少々きつそうだな

……

……

…

？？？ＳＩＤＥ

目の前の華雄の姿に思わず笑みがこぼれる

ボロボロの姿で地に這い蹲る姿はいつものこの女の姿からは想像出来まい

今気分は最高だ、今までの事も水に流してやれそうだ

「おい、華雄、もうこれから俺の邪魔しないってんならこれくらいで勘弁してやるよ」

「……っ……」

「あ？何言ってんだ？」

聞き取れなかったので耳を寄せる

「…当たり…前だ…ゴミに…人の言葉が分かって…たまるか…」

「このアマッ！！」

思い切り顔面を殴りつける、せっかくの気分が台無しだ

「おい、そこの！」

「え？俺？」

「この女の腕落とせ」

「は？」

「この女の両腕切り落としちまえ！」

周りのゴロツキも流石に狼狽した

「お、おい…そ、そりゃやりすぎだろ…」

「そ、そうだぜ…そりゃ確かに今まで散々やられたけどよ…」

「うるせぇ！！やれってんだよ！！…それとも、てめぇら代わりに切り落とされてぇか…？」

「ひっ！？」

男の目は本気だ、逆らえば代わりに腕を失うのは男達だろう、男達は覚悟を決めたようだ

「……お前達…何、してる…？」

そんな中、場に似つかわしくない声が掛けられ、男達がビクリと反応した

「あ？なんだテメェ？」

首魁らしき男だけが値踏みする様に見ている

「……ボロボロ……大丈夫…？」

しかしその少女は声を掛けた頭らしき男を無視し、しゃがみながらこちらに話掛けてきた

「テメェ！無視すんな！！」

その行動は男の逆鱗に触れたらしい、髪を掴んでしゃがんでいた少女の顔を無理矢理上向かせようとした

「…ゃ…ゃめろ…その少女は…関係な…」

言い終える前にミシリ、っと音が聞こえた気がした

「うぎぃやゃゃゃ！！」

髪を掴んだ腕が放され、いつの間にか代わりにその少女が男の腕を掴んでいた

「……邪魔……」

「ぐぇっ！」

「がっ！！」

少女が掴んだ腕を振ると男は周りの男達を巻き込み吹き飛ばされる

「う……うぅ…くそっ…テメェ！…人質が見えねぇのか！！」

「……ちんきゅ」

「りょ…呂布殿ぉ…」

「テメェも大人しくしやが…れ゛っ！？」

倒れ伏した男には自分に何が起こったか分からなかったに違いない

いや、周りにいた人間でも理解出来た者は一人、華雄だけがその突きが男の脇腹を貫く瞬間を見ていた

「…お前達…恋の友達いじめた…許さない」

振るうは槍、後ろ手で構える姿はまるで牙を剥くケモノ

ほんの少し細められた瞳から殺気が迸る

「…恋の友達…虐める奴…悪い奴……悪い奴は……死ね」

ブォン！！

「ぎゃぁ！！」

「ぎびぃ！？」

一振りで正面に居た男二人から鮮血が噴き出し、赤の少女を更に紅く染める

動きに一切無駄はなく、振るう一撃はどこまでも単純で無骨、『突く、斬る、払う』という槍の特色を突き詰めるとああなるのではないだろうか

それがその少女が武人として目指すべき頂へ辿りついた人間だと教える

…強い、途方もなく強い、だからだろう

…自分をこれ程無力に感じるのは…

「ひぃっ！！た、助けてくれ！！ひ、人質は還す！！」

人質を押さえていた男は慌てて人質を離した

それはある意味で正しい判断、もう人質に意味は無い

しかしもう遅い、相手を食い殺すと決めたケモノに今更何を返した所でその身が喰われる運命に変わりはない

「…ちんきゅ…大丈夫？」

「ねねは大丈夫なのです、ですがあの人が…」

呂布は倒れた華雄に一度だけ視線を送り、その先の男へと殺気を向ける

「た、頼む…助け…」…その先を告げる事なく男は意識を手放した

そして男達の事など何事もなかったかの様に心配そうに私の側にしゃがみ込む

「……大丈夫？…」

「あ、…ぁぁ、大丈夫…だ…」

「無理に喋らない方がいいのです、あれ以上続いていたら死んでいてもおかしく無かったのです……ねねのせいで……ごめんなさいなのです…」

「…わ…私…が…悪いのだ、…主の忠言を聞き入れず…自身の力を過信した結果が…これだ…私に…もっと…もっと力が…有れば…」

視界がぼやける…頬を伝う感触が自分が涙を流していると告げる

「……私は……無力だ……強く…強くなりたい……」

……

……

…

???SIDE

「か～！ゆ～！う～！ちゃ～ん！」

「お…ぉえ…と…董君…雅さ…」

「か～！ゆ～！う～！ちゃ～ん！」

ドドドドド！！

「お…ぉぉぉ…」

脳が撹拌され意識が遠退く、このまま意識を失ってさえしまえば楽なのだが脳のシャッフルと同時に襲う激しい振動が無理矢理に意識を覚醒させる…もういっその事眠らせて欲しい

「ん！？これは…まさか！！」

急にストップした暴走特急が途端路地へと方向転換、そこでようやく俺も意識を取り戻し、『それ』に気付いた

呻き声…それも原因が側にいるならば間違いなくかなりの人数が出ているであろう事が容易に想像出来る程の

「…董君雅さん、おろして下さい」

「…ん」

背負っていた剣を一刀に寄越すと自身も一振り担ぐ様に構える

そして二人で路地裏から覗き込む様に通りを見ると

「っ！！…酷い…」

「ん…華雄ちゃん？…あれはっ！！」

そこにはボロボロで地面に倒れた華雄とその他大勢、更に槍を背に担ぐ様に構えた少女の姿

彼女は確か呂布…それとその軍師の陳宮…まさか彼女達が？

（華雄ちゃんが危ない！！北郷君助けに行こう！！）

路地裏を飛び出そうとする董君雅の腕を慌てて掴む

（ちょ！！董君雅さん無茶ですよ！！）

（華雄ちゃんが危ないんだ～！！は～な～し～て～く～れ～！！）

（駄目ですって！！相手は呂布ですよ！！）

（誰だいそりゃっ！！）

そっか、まだ呂布って有名じゃないんだ…って有名じゃない＝弱いって訳じゃないしむしろ有名じゃないせいで董君雅さんが今にも飛び出しそうな…！！

（くっ…もう…無理…）

暴れる巨熊を俺には留められない、今まで散々振り回されたぐらいの力だ、なんなく拘束を振りほどき突進を始める

「華雄ちゃんから離れろぉぉぉ！！」

「っ！？」

「なっ！？」

「なんですとぉ！？」

突然の乱入者に三者三様の驚きの声を上げる

しかしその中で呂布だけがその突進に対し槍の一撃を見舞おうと振りかぶる

振り落とされる稲妻の様な一撃に対し董君雅さんは斬り上げる様な一撃

ガンッ！！

互いの武器は激しく火花を散らし、反動で呂布さんは踏鞴（たたら）を踏み、董君雅さんも勢いを止められ数歩距離を取った

って董君雅さん強っ！？

まさか止まっていたとはいえ呂布を後退させるとはいったいどんだけなのか

「……お前…誰？…」

「ま、まずいですぞ呂布殿！！その格好は官吏の警備隊ですぞ！！」

「彼等は君がやったのかい？少し兵舎で話を聞きたいんだがね…まぁ、その前に華雄ちゃんを怪我させた報い、きっちりと受けてもらうよ！」

「あ、主…お…お待ち下さ…」

「北郷君！華雄ちゃんの手当を！」

「か、華雄さん大丈夫！？」

「ほ、北郷…あ、主殿を…止めてくれ…」

「華雄さん、無理に喋らないで！！」

「だ、駄目だ…彼女は…ゴロツキにやられた私とその娘を…た、助けてくれたのだ…彼女は…悪くない」

何だって！？

「ほ、ほんとに！？」

「そうなのです！確かにこのごろつきは呂布殿がやりましたがそれはねねやこの人を助けようとしたからなのです！」

「だ、だとしたら止めなきゃ！！董君雅さん完全に勘違いしてるよ！！」

慌てて董君雅さんへと声を掛けようとして俺は声を失った

…これ程の殺気を当てられれば当然だろう、むしろ一般人に毛の生えた程度の俺が耐えられたのが奇跡…いや、多分春蘭のおかげだろうな…

「…お前…恋の邪魔…」

「華雄ちゃんは僕の娘みたいなものだからね、手を出すなら…容赦しないよ」

言葉を交わした二人の殺気が更に膨れ上がる

呂布さんは今にも飛び掛かりそうな獰猛且つ直線的な殺気を、一方の董君雅さんはジリジリと追い詰める様な威圧的な気配を放っている

物理的な威力を伴う殺気が肌を焼き、喉の奥に篭る言葉が喉に張り付いて声にならない、言わなければ、なんとか口にしないと…

「ま…」

「うぉおぉぉ！！」

「…！…ふっ！！」

待って、と、ただそれだけ口に載せたかった

しかしようやく絞り出した声を引き金に、二人の武人は真っ向から激突した

ガッ！！

離れた二人の距離が零となりお互いの武器が火花を散らす、なんとか止めないと…！！…なんだ？

突然二人の上に影がさした

「あいや待たれい！！双方武器を納めるのだ！！」

「誰だ！？何処にいる！？」
「……ぅん？…（キョロキョロ）…」
今まで刃を交えていた二人が周りを見回す様な仕種をしている、董君雅さんに到っては何故か悪役臭い台詞でその人物が名乗るのを律儀に待っているようだ
「ハァ～ハッハッハッ！！私はここだ！！」
「……誰…？」
「天知る、神知る、我知る、子知る、悪しき蓮華（れんげ）の咲く処、正義の華蝶の姿有り…とおぉっ！！」
屋根の上から前宙を決め飛び降りる『それ』がスタッ、と、着地し着物の袖を翻しながら立ち上がる
「華蝶仮面只今参上！！」
…えっと…
「何故趙雲さん？」
いったい何をやっているのか？
服装は普段のままだがおかしな仮面で顔を隠している
ん？

そういえば…蜀で確か仮面の人が街を護る警備の話があったっけ…
あれが趙雲さんだったって事か？

「そちらの御仁、少し落ち着くべきだ、そちらの朱髪の少女はそちらの女性を助けた、貴方がその少女と闘う意味は無い」

「え…？ほ、本当かい！？」

「うむ、間違いない、私が助けに入る前に一人で片付けてしまった」

「そ、そうだったのか…す、すまない！ぼ、僕ってばはやとちりを…！！」

「…もう…戦わない…？」

「本当にすまない、つい勘違いを…」

「戦わないなら…いい…」

スッと槍を下ろし殺気を霧散させた少女は北郷と話していた緑髪の少女に気遣わしげな表情を向けた

「…ちんきゅ…大丈夫？」

「大丈夫なのです、むしろねねよりそちらの方が…」

「だ、大丈夫だ…この程度…」

「か、華雄さん！無理しちゃ駄目だよ！！」

無理矢理身体を起こす華雄を慌てて押し止めると…

「華雄！！」

突然の大喝に周りにいた皆は何が起こったか分からずびくりと身体を震わせ、唯一声の主を聞き分けた華雄がそちらを見遣る

「あ、主…」

声を発したのは董君雅さんだった、いつもの柔和な表情ではなく怒りを堪える様な眉に力の篭ったおっかない表情、俺のイメージの董卓そのものの顔でずんずん華雄へと向かってくる

「あ、えと、董君雅さん…？」

「北郷君、よけて」

「え、で、でも…」

「よ、け、て」

「…はい」

華雄さんから離れ遠巻きに見送る呂布さん達の方へ、事件が解決した為いつの間にか趙雲さんは姿を消していた

「どうして僕の言う事聞いてくれなかったんだ華雄ちゃんっ！！」

そしてがぁっと吠える様に一喝、ビリビリと空気が震えているような錯覚を覚える程の大音量に思わず耳を塞ぐ

「う、あ、その…」

…狼狽こそしているがこの大音量が耳にはノーダメージな華雄さんは凄いと思う…

「どれだけ心配したと思ってるんだいっ！！」

キーンと周りの人間達が耳を塞ぎたくなるような大音量でしゃべる董君雅さんはぶっちゃけ史実の董卓のイメージに近い

ま、怒ってる内容がスゲェ心配したって話だから董卓って感じじゃないか、姿形は似ててもこの人は…

「董君雅様ぁぁぁ！！」

ガッチャガッチャと音を立て物々しい数の警備の兵士達が集まってきた

「みんな、お疲れ様。で、早速で悪いけどこの連中、牢に連れていってくれ」

「はっ！」

「さて、彼等には流石に厳しい処罰が必要だね、無抵抗の人間にあんな真似をしたんだからきちんと酬いは受けてもらわなきゃね」

厳しい表情でそう宣言した董君雅さんは華雄さんを抱え上げる

「あ、主！？」

「さ、みんな帰ろうか、そちらの二人も、迷惑掛けてしまったね、お詫びに家でご飯でも食べていってくれないかい？」

「……ご飯」

「呂布殿が行くなら…」

「良し、なら決まりだ、行こう」

華雄さんをお姫様だっこのまんま路地を出ていく董君雅さん

「あ、主！お離し下さいっ！！じ、自分で歩きます！！」

「駄目、罰だよ、今日はこのまま帰る、ほら、みんなも行くよ」

暴れる華雄さんを抱え、裏路地から表の通りへと平然と歩き出す董君雅さんに続いて歩く俺達

案の定表に出れば周りの店先やら買い物客やらが華雄さんを抱えた董君雅さんに気付いて声を掛ける

「うわぁぁぁぁ！！こ、こっちを見るなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

（華雄さん、あんまり悲鳴は上げない方が…余計に人目を集めてて俺の方が恥ずかしくなってきたよ…）

恥ずかしさの余り暴れまくる華雄さんを平然と抱えたまま、声を掛けてきた人達相手に反応を返してる董君雅さん

紅い髪の娘は特に気にならないのか董君雅さんが周りの人達から貰う李やら肉まんやらを受けとってモクモクと口を動かしてる

俺と緑髪の娘はそんな様子を眺めながら端っこで知らない人のフリを決め込むのだった

◇◆第五話◆◇（後書き）

寸劇†無双

「前回予告として挟んだ寸劇†無双と本編の内容が噛み合いませんでした、この場を借りて謝罪致します」

「というより今の今まで全く更新なかった事を謝りなさいよ、約一年更新無しって…停止し過ぎ」

「それに関しては深く謝罪を、仕事の都合で小説に手を出す暇がなかったという状態でしたんで」

「今はまだ暇が出来た訳じゃないからどうせまたしばらくは停滞気味になるわけでしょ？」

「それでも見捨てないで居て下さる方、よろしくお願いします」

「見捨てられたくないならないなりに頑張る事ね」

「……頑張って書きます」

「ま、頑張んなさいよ、今回は次回予告は無しで、多分次も予告通りいかないから」

「「それでは～」」

寸劇†無双　終

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5224n/

天・恋姫†無双～願わくば君との時間を～

2011年10月24日07時50分発行